
景品の出る東方賽銭箱

DEEP三昧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

景品の出る東方賽銭箱

【Nコード】

N9820G

【作者名】

DEEP三昧

【あらすじ】

八雲紫が、景品の出るお賽銭箱を持つてきた。ガチャガチャポンポン御参りすると東方Project二次創作な巻物語がポンと出る。神妙不可思議、怪し妖しきお馬鹿な話。真剣に悪ふざけた東方巻物語蒐。貴方も、ひと詣で どうですか？

【残酷な描写を目的や主体とした景品は出ませんが、表現の一環としては確かに一部そんな描写も無くも無いとか、杞憂とか。が、御安心下さい。色々フィクションですわ？(BY・紫)】「が、『タグ』だけは付けた方が良いつて、けーねが言つてた」

八雲紫のお賽銭箱が、神韻の極み

幻想郷

博麗神社

「ん…しよっ」
ズツ　ズズツ　ズ

「これで、良し…と」

「おー何だそれ霊夢う」

「紫がね？」

「置いてったのよ」

「賽銭箱だな」

「お賽銭箱よ」

「…あ、その何だ」

「空の賽銭箱が一つから二つに増えたって、集銭力が倍になる事は…」

「無い」と思っせっ?」

「余計なお世話よっ」

「そんなつもりで置いてるんじゃないんだからっ」

「ツンデレか?」

「なんの話?」

「じゃなくてッ!」

「紫が言うにはね…このお賽銭箱は、それはもう特殊な、お賽銭箱らしいのよ」

「それはもう、特殊なんだろうな」

「そう。景品が出るの」

「景品がッッ」

「お賽銭入れて、鈴をガチャガチャッと鳴らして、礼してポンポンッと拍手をすれば、ポンとカプセルが出てくるのよ」

「ガ…ガ ポンか？」

「ガ ヤ ンね」

「何で伏せるんだ？」

「正式な商品名だったり、商標だったりするかも知れないじゃない」
「念の為よ」

「…世知辛いぜ」

「で、そんなの境内に置いてどうすんだ？」

「…的屋よ」

「今度の宴会や、祭りの度にコレ置いて、景品のテキ屋をやるのよ」
「！」

「博麗のお賽銭箱にお賽銭入れば、何時でも何処でも、お賽銭とか信仰とかお賽銭とかが集まるじゃない！」

「霊夢…それはヤケって云うんだぜ」

「ヤケじゃないわよ」

「ちゃあんと、実質的な御利益カプセルがあるんだから、真つ当な神主の活

動だわ」

「で、御利益カフセルの中身は、どんな御神徳ケイヒンなんだ？」

「それがね。巻物語りの読み物なんだって」

「おー、それは興味あるぜ」

「紫が言うにはね……」

これはね……この幻想郷のみならず、ありとあらゆる世界の者たちが、体験したり、聞かされたりした事柄の中からね。

少なからず、この幻想郷に関わりや近しさのあるものが、巻物の中に物語として集約されるの。

「小さな巻物に入るような文字じゃ、小さすぎて読めないんじゃない？」

視認と認識の境界がイイ感じになって、結果的に開いて目にしたら、体験したと錯覚できる位に理解出来るから、大丈夫よ？

面白いわよ？

パラレル世界っポイ、私達っポイ者達の事だったり、外で偶然創造された幻想郷に”近しい的”な事だったり……演じた演劇や観た映画や、本を読んだ内容なんかも体験だから……何かが幻想郷に近しけれ

ば、巻物語になつたりするわ。

「そーなのかー」

誰の真似？

兎に角、まんま私達の事が出てくる確率の方が、天文学的の京倍の天文学乗位ね。

あと、これ。

「ん？ なにコレ？」

魔理沙用

(それは、本当に面白そうだぜ)

(ま、賽銭いれる事は無いと思うけど、その内、何とかして借りてみる事にするぜッ)

「って…ちょっと待て」

「なんだ、その私用って云うのは？」

「ああ、忘れてたわ」

「はい、魔理沙用」

「”1”って書いてるな」

「出した順番の数が御利益に書かれるらしいわ」

「で、それは今、魔理沙にあげるの」

「おおッ それはありがたいッ」

「それでは、早速読んでみるぜ！」

シユルルル ル……

「……お おッ」

「すげえ……」

「………」

「さてと お茶飲も」

そんな、わけで…

思い付きのネタっぽい東方小話や、時には幻想郷においての外で
すらない、現実を舞台にした東方狂いな人の話とかを、本当おゝ短
い内容にして出してくと思います。

基本的には、巻物語りと巻物語りは繋がらず、アンソロジー的な
感じに出してく予定です。

殆ど思い付きの、ちょいネタだから、キャラ崩壊著しい顛末にな

る筈ですが…ゆかりんの仰せになった通り、

『幻想郷の住人とは、あんま関係ありません』

『ナンカ似テル様に想えるだけです』

「…魔理沙？」

「お おおー！」

「れ 霊夢ツツ！！」

「な なに？」

「この分の、賽銭払うぜツツ」

チャリ〜ん！

ガチャガチャッ！

ポンッ ポンッ！

ま 魔理沙が、お賽銭箱にお賽銭をツツ！

「じゃ じゃあ、私はもう帰るぜツ！」

「じゃあなッ」

「えっ、ちよっ」

ヒューウウウン

「…行っちゃった」

「紫…イケるわ！コレ」

「まさに神韻の極みね」

1巻：古き者と旧き鬼神（前書き）

残酷な描写が出るかも知れません。

ご注意ください。

あとホラー的。

が、御安心下さい。

色々フィクションです。

1巻：古き者と旧き鬼神

「…ふふっ」

緑髪の女性が、微笑を浮かべたまま、立っている。
いや、ほんの僅かばかり浮遊している様にもみえる。

「…んふ…ツクク　ククツ…ふふフッフフ…そうよ…そうなの
…」

「…そうだったのヨ？」

向日葵の様に明るく色鮮やかな日傘を、手や指で添える程度にし
か触れぬままに、独りでにクルクルと回しながら…

とても幸せそうに、穏やかな表情を向けている。

ツツゴぶツ！！

「っヴツ…グ　ウウツ」

吐血か吐瀉せじとかも判らない赤黒いヤツが土へ吹き散る。

ビシャッ

タパパパ…

「あ…う　う」

もちろん…

綺麗な口元で微笑を浮かべる女性は、そのままにいる。

微笑の女性とは対照的に、膝をつき、地の土と白と赤い色の装束に、艶やかな長い黒髪までを赤黒く汚している女性が…

その生気の霞んだ眼差しで、微笑の女性を見上げている。

「あ…あ…あなた…ウツ」

「ふふ…誰が見ているわけでもなし…」

「今までの気まぐれは…もう、お・し・ま・い」

「人間は…妖怪には…取って喰われる…ものなのよ」

微笑の表情が、だんだんと作りモノめいた笑顔に変わってくる。

「ただただ喰われる…ものなのよ？」

「………」

紅白装束の女性は、ヒキツケを起こす様に度々身震いする体を、少しずつ立ち上がらせようとしている。

「だから、”本当に”襲う事にしたの」

「たった今、そうする事に決めたの」

「私の躰で、私の力で、私の心で私ノ好ミでワタシノ ソンザイ
デ ワタシガアナタヲオソウノ ヨオ？」

力と智恵のある古き妖怪は、もはや唇を動かす過程も放棄して
いた。

カタチ在ると云う事の擬人的な作法も止め、弾幕も個性も止める
事にして、人に似たその姿のまま微動もせず、立体制止映像の様に、
ただソコに見えていた。

「ダカラ…モウ、ニンゲンハ」

「アナタ ハ オウルシカナイ ノ」

…人間の女性が、ようやく立ち上がり、今度は少し生氣のある眼
差しで顔を上げた時、人間ではない妖怪の姿も声色も、元の擬人的
だった感じに戻っていた。

「ねッ？…私はスペルカードルなんて、止めるべきでしょ？」

「それだけで、もうあなたを喰えるのだから」

女性の眼差し…少し生氣のある…と、言うものとは少し違ってい
た。

「^{ニンゲン}あなたに為す術なんて、与えられようが無いのだから…」

何故か…凄惨な状態で絶望的な状況に晒されながら…憐れみを…
憐憫の眼差しを、妖怪へと向けていた。

「では…人間のあなたに、最後に特別に教えてあげるわね？」

「本当の、妖怪の”人を襲う”と云うものを。」

パチ パチパチ…

パチ パチ パチ

乾いた拍手の音が響く

それも、さも面倒臭そうに、パチ…パチ…

「はい はい」

「懐かしい、懐かしい」

「あんたで何回目だっけ」

「私が幼かった頃に何回かだけど…もう覚えて無いわね」

まだ、消えて滅したわけでは無いが、色々散らし、ズルツルと這いつくばっている緑色の髪をした妖怪。

別に驚愕の表情は、浮かべていない。

ただただ、そうある存在であるかの様に這いつくばって、動く分だけ四肢を藻掻^{もが}かせている。

例えば、本当に特に能力もない人間が、妖怪に襲われる…

絶望こそするだろうが、その妖怪に小枝を投げつけ、妖怪に何のダメージが無くとも、その事実^{事実}に驚愕する人間などいない筈だ。

「う あ」

そう云う喰らい方を、この女にしてやるハズであったのに…

…もう、これ以上私を襲うのをヤメてもらいたい…私が、あなたに、何か^{何か}が出来る筈がない…

心底、そう思わされている。

「本当の妖怪の？」

「…人の襲いザマ？」

ビクッ!?

カタ カタ カタ カタ

怖い怖い怖い怖い

怖い怖い怖い怖い

「あんだこそ…」

「こと妖怪にとって…スペルも何も無い…」

「本当の結界の退魔と云うものが、」

「！！？ ケ ケツ…ケツカイ…い イ嫌アー！！」

「うツツさい(怒)」

「…まあ、…あなたは、もう染み憑いただろうし…」

「私も返すもん返したし…」

「別にSのケも要らないからね…私からは、もう良いわ」

「ほ ほんとう？」

「許してくれるの？」

「許すも何も、私はしたい事しただけよ？」

「何より私が死なない事が大前提だし…ここまでだったら、矛先が
向く事もないでしょ」

「…え？ …なに？」

何かの気配が、漏れ出てくる…

「私なんかヨリも、完全に切れてる奴がいるから」

耳鳴りの様にキーン…と、直接頭に響く…

ラジオノイズ、テレビの砂嵐のような音が単発に

ザツ ザザツツ…

そして、

キュ キイ ヒツイツ

イイイインツ

ガラスか黒板を引つ掻いた音とも、甲高いヒメイとも感じる…

最初は単発的に聞こえ

突然！爆発的に！

キイ ザツ！

ザザツヒヤ ザ！

キヤキュ！ザツ！イイ！

ザツ！ザキヤアア！！！！

がばっ！空間が。

奇音の爆発と同時に、突然に！ガバツ！と、空間が裂け割れたのだ。

そこに恐怖があつた。

2メートルに及ぶ裂け目から、蟲の如く蠢く単眼の全てが妖怪に向き、ダバダバと黒濡れた赤い血涙で染め合っている。

「あ…ああ…嫌あ」

真っ白くほっそりと長い、気持ちの悪い無数の腕が、血涙に染められながら、柳の如く垂れ揺らめいている。

マサカ アナタ ガ ヤルナンテ…

カタカタカタカタ…

「し…知ってる…」

カタカタカタカタ

「でも…」こんな”の知らない…」
カタカタカタカタ…

コレホド マデ イカリガワク ナンテ ワスレテイタわ？」

ネバ付く様に裂け目の内容空間を纏わせて、一切赤黒く染まること無く…

”本当の”、化け物を人間の如く恐怖させると”謂ふべき畏れ”が現れた。

「すごく 狂ってしまったのかしら？」

何時間も前までは、緑髪の妖怪も、コレに近い表情を浮かべていたが…

非生物的なくらい不自然に咲き零れる笑顔。

総ての存在に、一切の興味を向けていない、圧倒的に美しく忌まわしい。

本物の、旧き人外の穢レ壞レタ微笑みとは、こんな様相をいうの
だろう…

「さあ…オイデ…」

「本当の妖怪の”襲イ”をしたかったのでしょお」

もう、唇も動かしていない…

「私がシてあげる…コノ私が…」本当に”襲つテあげル」

とうとう、抑揚も女性的な声質も発声源も定かでなくなり…

「イイヤ イイヤ」

「この…クニツオンリョウ國津怨霊…」

いいえ…

クニヌシオンリョウウカコメノキシ
國主御霊困目鬼神

厄ヤク「イ イ イヤア あ あ アアーキイ ザツ！ ザツキイツ

ヒ!

ザザッヒヤ ザ!

キャキュ! ザッ! イイ!

ザッ! ザキャアア!!!

しい……いいん……

無音。

人間の女性以外は、何も居なくなっていた。

「……」

「お腹空いたし…帰ろ」

古き緑髪の妖怪は、その後、選別的に全てを忘れ、半分壊れかけた様でも正常な様でもある状態で、花々の咲く場所を求め彷徨い続けている。

いずれ、あらゆる季節の花々が全て咲き出すという異変が起こるが…

それはまた、別の物語

終幕。

キャスト

- ・楽園の素敵な女性
- ・境界に潜む旧き者
- ・四季の花の古き者

演目名

『みんなで守ろう　楽しく掠ろう　弾幕戦闘』

提供

- ・スペルカードルール推進委員会
- ・完全非弾幕戦闘撲滅委員会

追記、旧き者から白黒魔法使いへ。

「決まり事って大切よね？　個性と自我と、どちらをヨリ守りたいかしら？」

旧き者から永遠と蓬菜の闘争者達へ。

「仏の顔も…って、云うわよね？　フフフ…」

楽園の女性から、全ての観覧者様へ。

「あ〜…え〜つと…」

「ああ、そうだ」

「この物語は、全てにおいて、只の語り物で…」

「えと、フィクションです…だそうです。」

「…ねえ、何でこんな変な事、空気に向かって言わなきゃならないの？」

「だいたい、ほん　ムグツ！　ンッんンー

終わり。

2巻：秋空に舞い逝く厄（前書き）

雛・魔理沙・霊夢のファンの皆様、本当にご免なさい。

お酒は二十歳になってから

あと、お食事の直前・中・後の御観覧には御注意下さい。

最後に

色々フィクションです

2巻：秋空に舞い逝く厄

季節は秋…

神社に緑の巫女っぽいのがやってきて、神社を明け渡せの事を言い放ち、去っていったので、喧嘩を買ってあげる事にした。

「そんな、粗いあらすじだったっけ？」

「いいのよ、魔理沙」

「この異変、一番癪に障るんだから」

お芋の香り漂う神様を退けるまでは、お芋の香りが漂っていたのだが…

「なあ霊夢…何か…」

「嫌な雰囲気…」

「…と云うか」

「お酒臭いわね」

「あらあら、また来たの？」

「ついさっきまで、エンディングで、散々お酒呑み散らしていたっ

もりだったのに…」

「即、Lunaticで再入山とは…Hardを終えて調子こいてるのかしら？」

杏色つばいリボンに覆われた様な服に、人形のような容姿。そんな神様が緩めにクルクル回りながら姿を現す。

服だけでなく、何か顔も赤っぽくなっている。

「うわッ 酒臭ッ！」

「うふふふ…」

「Lunaticを甘くみると ウプッ… 厄い厄い目に ウッ！
なるわ？」

「いま”私”のスペカを受けると云う事が何を意味するか…」

「かく ウ…覚悟は出来てるんでしょうね？」

「うふふふふ」

「魔理沙…私、凄く厄い予感がするわ」

「私もだぜ」

「こいつの言ってる意味は、分からないけどな」

「さっきの芋の匂いした神様が、正直芋と云うより、芋焼酎のお湯割りっぽい匂いさせていたのと、関係があるのかも…」

「始まるぜ。霊夢！」

「あなた達が悪いの！」

「アナタノヤクヲサカセテアゲルウウ〜」

くる クルクル

クルクルクルクル…

グルグルグルルル

ウ ウプ

ウえ あ

ウう う あ

あ あかん

やっぱ コレ

これ、やるわ

グルグルグル…

ワタシ厄るわ、これ

悲運「大鐘婆の火 - Lunatic -」

ウウヴツ！

ヲロロロオオお〜

ペカー！

悲運「大鐘婆の火 - P H A N T A S M -」

キラ キラ キラ

「うわッ ぎゃああ！！！」

「！！！！？ さ 最悪だわ！！！」

四方に舞い散る、ファンタズム！
鼻腔から意識を襲わんと、引き連られ来る厄。
そして弾幕。

秋の空に展開される、
”ファンタズム春の厄”

「うわッ うわわわッ」

キラ キラ キラ

ベシヤッ「ひッイ」

ふわぁ（厄）あゝん

「魔理……！！」

フツ（失）……

ドガガガガガッ！！！！

ピチュウウウーン

……ポチャーンッ

「魔理沙ファンの皆様、ゴメンナサイ」

「ま り さぁー!!」

「う うふふ…ウ」

「あなたは、良く避け切ったわね」

「あんた…よくも魔理沙を…」

「あなたも、もっと際どくグレイズすればヨイのよ」

「冗談じゃない!!」

「も もう私も限界が近いみたいだから、最後のはタイム短めで逝くわ」

「ちょ」

「ちよつと待って!!」

「ダメよッ」

「待てないッ!!」

ナニかが、もう一刻の猶予もナイのッ

創符「流刑人形 - PHANTASM -」

ヒュッヒュヒュ

ヒュヒュヒュンッ

「ひいいイイー」

キラッ キラキラッ!

「絶対、避け切ル！」

ASM - 「：00 カチッ！

「ヴッッ！！！！」

ヒユウウウ ……ン

…ボチャーント

「雛ファンの皆様、ゴメンナサイ」

「はあ はあ」

「サ 3秒も保たなかったみたいね」

「助かつ ウウ ……」

ぴチャ（髪）

『 うッ！ 』

「霊夢ファ 『3秒ルールッ！』

ザッックッ

すぱーーん！！！！

”パスウェイジョンニードル！！！”

サラサラサラ ……

「 …… 」

「ふっ… PHANTASMな季節には、このくらい髪が短くなった方が良いの」

河童の住まう川
大将棋盤

「うわッ!!!」

「もみじッ 椀い!」

「川がッ 川がッ」

「川がエラい事にッ」

『うわぁ 本当だ!』

『ヴッ や 厄うッ』

『にとり もらいそぉ』

「椀いいい」

『少し 落ち着いた』

「椀には、特に酷コウすぎるか」

「兎に角、本当にPHANTASMもらう前に、空へ避難よ」

『うん…』

『あッ 川に』

「あ」

「魔理沙だ」

㊦

雑ざだ

㊦

2巻：秋空に舞い逝く厄（後書き）

「……」

うん、まあ…パラレル世界っぽい、幻想郷の住人っぽい人達の巻物
語ですよ…

ゆかりんの仰せの通りです。

きつと、こんななっただけど…” 東方賽銭箱”をどうか見捨てな
いで下さい。

3巻・永遠須臾に利く言霊

魔法の森の近く。

妖怪も人間も来る事は出来るのだが、さして繁盛もしていない道具屋。

繁盛してはいないが、賑やかなのが、そこそこに訪れるし、仕事も落としてくれる。

今日は、その”そこそこ”に入りに来てくれただけではなく、仕事も落としてくれそうな珍しい客が来た。

「店主はいるかしら？」

「ここは僕1人の店だからね」

「店が開いてて、中に入れた時点で、店主は居るよ」

何か用事があれば、ウサ耳生やした妖怪が薬屋さんを運営しているらしい従者に、全て放ってしまいそうなイメージのある人が、連れもなく自ら来店してくれた。

「いっしょにしゃい」

「今日は、どのようなご用件ですか？」
「何か、お求めの品でもありますか？」

お客様は、書物のあたりに暫く目を向けた後。

「実は…意味を調べたい言葉があるの」

「私の周りに知ってる者はいなかったし、この店で、関連する読み物でも見つからないかしらと思ってね」

「なるほど…で、お求めの”言葉”とは？」

お客様が、僕に問われた”言葉”を言おうとした時…

何故か…須臾しゆじゆんに儂ゆるげな感情を乗せた空気が吹き込んできた気がした。
それは、ほんの錯覚的なまでの須臾しゆじゆんな間だが…

「”にいと”って言乃葉…あなた知ってる？」

「”にいと”…ですか」

「ニットでなくて、ですか？」

「そんな、帽子にしたりすると温ぬくくしてくれそうな、素材でない事は確かね」

「何か、今までの御探求の中で手懸かりになる事など、ありましたか？」

「残念ながら皆無ね」

”お手上げ” といった感じに、片手の平を下に向け、ヒラヒラとするお客様。

正直、すごぶる可愛い素振りだった。

「全くの皆無…どしたの？」

「あ いや。」

「確かに、この幻想郷には外の世界から様々な物が、境界を越えて流れ着いてくる」

「書物の類も、その例外ではなく、名称も用途も判別出来るのが僕
の能力ではあるが…」

「少なくとも、陳列してある物からは、心当たりが無いと云うわけ
ね？」

「分かっているのは、その単語の”音”だけなのかい？」

お客様は、雑誌類などの書物を、一冊ずつ手に取りながら、内容を
流し読みしている。

「ん…実は何も知らないのよねえ」

「物質か物事を指す名詞なのか、状態やら動向を指す動詞か、感情
的な形容詞なのかも…」

「ただ、不確定ながら確信を持って推測出来る事があるわ」

「それは？」

「あの、焼鳥女が私に言い放ってきたのよ？」

「私に、あんな蔑んだ抑揚と目つきで言うのだもの」

「良くない意味の言葉に決まっているわ」

「 良くはない意味の言葉…」
「 少なくとも、” にいと ” なる言葉に関連した書物の一冊も流れてこないという事は…」

自分の仕事と趣味の範疇はんちゆうから、推測を巡めぐらせてみる。

「 仮に外でのみ通用している言葉だとして…」

「 外では、その言葉に関連するあらゆる事象の一切が、失われていないのかもしれない」

「 だから、手懸かりとなりうる情報の一端程も、この幻想郷に流れてこないのだろう」

「 不都合な事だわ？」

「 とつとつと、死語になってしまえばイイのに」

「 困難な事かもしれないな…それも、良くはない事象を指す言葉で、且つ、該当しないか直接的には言葉の悪意を被おそらないでいられる者の方が、社会的に圧倒的な割合を占めている場合は、尚更だろう」

「 人は誰しも…穴二つ要する程の筋合いも生じないのなら、むしろ進んで、一方的な言霊弾幕ごっこをしたがるモノだからね…」

そこまで言うと、お客様は手にしていた雑誌を戻し、軽めな溜め息をつく。

「だとしたら、アイツが私に言ってくれるのも、頷けるわね」

「私達の体じゃ、穴二つ用意する必要すら、無いのだから」

何やら意味深な言葉が気になる…あの地域には不死の秘術に関する秘密があるらしいとの噂を聞くが…

「まあ 残念ながら、当店での心当たりはありませんが、もしかしたら、意味を知る者なら幻想郷で会えるかも知れませんか？」

「私に言ってきた当人というのは無しよ？」

「違いますよ」

「幻想郷に入つてこない程に外で溢れている事なら、外からくる魂に接触する者なら、話を聞いた事があるかも知れません」

「なるほどネ」

「確かに、その手があったわね」

「特に、無縁塚…三途の河の水先案内人などは、何でも幽霊と話をするのが趣味らしい」

「といつても、大体一方的に話しているらしいのだが、どうも本人には幽霊の言葉が届いている節が、見受けられるそうですよ？」

「そう言えば、以前そんな者に会ったと、家のイナバ（鈴仙・てゐ）達から聴いた事があったわ」

「行って聞いてみようかしら？」

「あ…ちよつと」

「あら…「めんなさい」

「今度は、ちゃんとイナバをやって何かしら買いにくるわ」

「いや、それはありがたいのだが、そんな事じゃなくて…」

こんな事を言うのは、お節介なのかもしれないが…

「お節介な事かも知れないが、もし本当に”非道い”意味であるならば、知ること、大きな傷を負う事になるかも知れない」

「知らぬが仏」と言う事も、この世には確かにあると思うんだ」

「ふふつ。ありがとう」

「肝に銘じておくわ」

行ってしまった。

もしかしたら、重々承知しているのかも知れない。

自分が…とても傷付く結末に至る探求をしているのかも知れないと。

だからこそ、あの人は、1人もお供を連れずに来店してきたのではないのだろうか？

3巻・永遠須臾に利く言霊（後書き）

お店にきた、お客さんは誰だったのでしょうか。

知らんわあ〜

いつもいつもの事ですが、最初の一語を打ち始めるのに時間がかかる。

何書くのか決まれない。のに書きだした途端スツと頭の霧がはれてスラスラ。

不思議不思議なのです。

4巻：臆で敵かな渡し賃

つまりね

本質的には、だけれど。

当てられる文字・漢字と云うのは、重要ではないのよ。

その時々^々の解釈や背景によって、違う漢字で表記されていたりするモノなの。

其れよりも”オト”なのよね？

その神様達の名前の音。

どうしても、神様達や神様達の名前の意味に触れたければ、見て認識出来る文字の意味も魅力的で、大切だけれど…

言の葉の言霊の音を、深く深く心に浸^ツけて、一等に扱^ツう事が大切だわ。

「あ の 「

私は、こつこつ考えてしま^ウ事があるの。

神様や精霊、自然の風雨に地の這う蟲：数多あまた不確かなる万象。
人は昔、口伝で崇め伝えては、畏れる様、触れぬ様、障さわられぬ様に
生きてきた。

曰く総じて”鬼”と。

そう。不確かなる故に、存在も幻想も区別なく。

不確かなる故に、眼マナコに捉ええぬ、手に触れえぬは…祀ろうとも祀ろ
わざろうとも、”蔽かなる鬼”。

いつからか…

神か鬼か蟲になつたわ。いつからか、

天津神か国津神…

妖怪か精霊か魂…

昆虫毒虫微生物…

果ては、神様も妖アヤカシも這う虫さえも、個々に名前が付けられ活字で綴
られ、完全に個体の認識を持つたわ。

「いいたい」

漢字の持つ強力なイメージ力を得ると、臆な信心を霞ませて…見れ
ば済むから心に名を留める事も、必要ではなくなる。

果たして…人が鬼の名や意味を知る事によって、臆で蔽かな鬼神は？

高まつたのかしら？

貶オトシめられたのかしら？

そんな事を考えていると…せめて私は、知ってしまった名前だけで
も、見ええぬ触れえぬ、臆な言の葉の”音”を大切にしたい…と思

うの。

「ひ 膝が…足がもう」

それにしても、名の持つ当て字の力も絶大よね？

音をそのままに、不都合な真実と畏怖を、さも崇め祀っているかの様に取り繕えたり…

その時々に必要な役割や力を、名に当てる”形”と意味で、より強力で揺るがぬ確かなモノに出来たり…

「あつ あの！」

なあに？

「もう、あたい…」

「膝と足が限界だよ」

あらあら…

あなたが、話を聞きたいと言っから、こうやって講じているのよ？

あなたが、自ら求めて、私が講釈を与える。

なら、あなたは”正座”が基本でしょう？

「…四季様みたいだ」

「あんたさあ…」

「そんなだから いぎッ（亡）て時、微妙に嫌われてるんだよ」

最初に、あなたから聞いた、渡し銭の話の事ね？

お陰で、もつともつとあなたに話が出来るわねえ

「か 勘弁してくれよお〜」

「大体、あたいが、いつまでも正座してちゃあ、渡せる舟も、渡せやしないよおお〜」

あら。あなたが笛吹いて銭撒いてた時には、スクリューエンジン積んでたじゃない。

あれ出せばイイのよ。

「なんの話だよおお？」

こらッ！

「きゃん！」

ちよつと足崩さないッ

大体あなたは、私が来た時みたいに寝っころがってばかりいるから、正座も出来ないのよ。

もつと背筋をシャンと！

腰の重心をしつかり真ん中に足に乗せる！

「ひい〜ん」

そう。それでイイの。

足の親指同士を重ねてみたら足は痺れずらいわ。

「あんだなんて、振るい落としてやるおかあ」

落とせばいいわ。

私に今、後ろめたさなんか無いもの。

あなたが己の尊厳を以て、執行するのなら、甘んじて受け入れるわ。はたして咎を負うのは、どちらかしら？

「し 四季様に、怒られまければいいんだあゝ」

…あなた、段々卑屈になつてきてない？

”四季様”ってあなたの上司の事よね？

私を怒る人つて、詰まりは閻魔様ね？

あなたが先程、”私が似ている”と言った。

楽しみだわあ。

何か気が合いそうで。

それに、私の悪い所を白黒しっかりつけて進言して頂けるのよね？

しっかりと、伝えておくわね？

私に似ている四季様を、渡しの小町が、”微妙に嫌っている”そうです！

ってね

「はわッッ」

「違うんですッ違うんですッ！」

「そんな積もりは！」

うむ

良い正座っぷりね！

「どうか、それだけは御勘弁を〜」

そうと、決まれば一刻も早く閻魔様の元へGO!よ。

さあ、いざッ

スクリーエンジンで快速航行よ

「いやあ〜ん」

4巻：臆で敵かな渡し賃（後書き）

あくまでも”幽霊さん”の解釈です

小町限定で話せたって、いいじゃない。でも、小町に届いてるだけ、話し声とか無いから。

誰か目撃したら、進まぬ舟に正座の小町。無口の幽霊…かなり面白い絵。

追記

笛とスクリーンエンジンのくだりの件ですが、ニコニコ動画のwinnさんの作品がネタ元です詳しくは、ニコ動にて

『東方電気笛4』で、

ご検索&ご観覧下さい。

5巻：水無月幻想郷都市伝説

幻想郷にも、都市伝説と言つものがある

「本当よ？ 本当に見たんだって！」

「嘘じゃないわよ」

「信じ難いですね」

「とても記事に出来る程の信憑性は、感じられませんよお」

「信じる信じないは勝手だけど、取材協力したんだから、お賽銭出
しなさい」

「あ！ 次の約束に遅れますのでえ！」

「ありがとうございますあ」

それは、黒き姿で現れる

「言つとくけど、鏡があつたわけじゃないぜ？」

「確かにこの目で見たんだって」

「お前だって、前に見たかもって、騒いでなかったか？」

「あの時は、ハッキリ確認する余裕なんか無かったですし…」
「結局、証拠不十分で”お蔵”にしたのですよお」

絶対に

現れるハズのない

「百歩譲って、そんなのも実在したとしても…」
「その事と、今の季節について事とは別次元な問題だと思っんですよね」

「そっだな」

「私の知る限りでも、そんな歴史に触れた事も創った試しも無いな

…」

「妖精の事は、妖精に聞いたらどうだ？」

この季節に現れる

「黒いのお…ですか？」

「さあ？あの子とは普段は、お会いしませんし」

「あの子の季節には、それはそれは活発に移動し続けてますから、何とも…」

「イメチェンとかは、しそうにないですか？」

「あの子も、女の子ですからね。服装のイメージを変える事もあ
るかも知れせんネ」

「でも この時期に、と云うのは」

「チルノちゃん。何か知ってる？」

「ヘッ？ あ いやーサイキョーのあたいにだって、知らない事く
らいあるよ？」

「黒と言えば…：そういえばチルノちゃん、大体今くらいの季節にな
ると、黒い羽織袴ハオリハカマ着て1人で出掛けちゃう事ってあるよね？」

「そうなんですか？」

「”黒い”羽織袴…何か秘密の匂いがしますね」

「な な な 何言ってるの大ちゃん！」

「そ それは、ホラ！…言っただじゃない！」

「闇鍋同好会の活動コスだっつ」

「闇鍋ですかッ！」

「氷の妖精であるアナタがですかッツ？」

「まさか、アナタから蛙以上のネタの可能性が出るとは」

「いや、ネタ所かスクープですねッ」

「そう言われれば…何だか私も誤魔化されてた気が…」

「チルノちゃん、是非に詳細希望ですネ」

「大ちゃんまで！」

「別にキンキンに冷えた闇鍋があってもイイでしょ！」

「闇鍋は秘密めいてやるから闇鍋なの！」

「これ以上”闇鍋”の事に触れてきたら、パーフェクトフリーズよッ！」

「別に怖くもありませんので、教えて下さい」

<凍符「マイナスK」

天狗も知らない、都市伝説

「あいたたた…」

「まさか私が不覚をとりかけるとは…」

「そーなのかー」

「で、闇鍋と言えば闇と云う事で、アナタにご詳細を伺いたいのですが」

「何で私が妖精と闇鍋をするの？」

「いやあ…何かもう、生態的に妖精と大差ないかな、と」

「むしろ黒い妖精の正体もアナタな気がしてきました」

「ちよつと、闇を小さく濃く密集させて、空高く舞ってみてもらえますか？」

「陽気な感じで、春ですよー って」

「闇鍋かー」

「種類取り取り、鳥を大鍋にぶち込んで闇で覆って、紅魔郷同窓闇鍋パーティー…なんて、門番ちゃん越しのメイドに提案したら、まず確実に実現するわね」

「ひッ！ 絶・対・止めて下さいッッ！」

「ところで、目の前にいるのと、肩に乗っているのが、取って食べてもイイ鳥類？」

「ああッ！待って！置いてかないでえ！」

「おーいッ！そういえば、蟲の妖怪が真っ黒い羽織袴着てるの見たよー」

それが ” 水無月に舞い来る喪服リリー ”

「蟲の妖怪じゃなくて、蟲を操る螢の妖怪ね」

「蟲じゃないですか」

「別にどっちでもイイけど、取り敢えずは、その肩の鴉が凄く見えてくるのを何とかしてくれないかな」

「今は食べちゃダメよ」

「それより、今すぐ山に戻って皆に忠告してまわって!」

「もし、仲間が不穏な失踪をしたり鳥狩りがあったら、真っ先に私か椀に知らせる様につて」

「鴉も狩られるんだ?」

「イヌワシ犬鷲の妖怪でも出たの?」

「天狗が、選りにも選って狗鷲に取って喰われたじゃ皮肉では済みません」

「なに、あなたも危ないの? それは、スクープね」

「長期保証の投身型密着ドキュメンタリー」

「良かったじゃない」

「相手は違えど、間違えば鳥保守戦争…そんな異変は記事にしたいくありません…」

「気を落とさないで?」

「その時は、私も鳥相手に蟲保守戦争を仕掛けるから…苦しみはアナタ(鳥)ばかりにさせないよ?」

「……」

「それじゃ、私はこれで」

「いや、待って下さいよ」

「……チツ 何?」

「その真つ黒い羽織袴は何なのですか？ フードまで付いてるし」

「あなたは、カッパを知らないの？」

「河童？ はぐらかそうとするなら、もっと関連性のある話題を選んだらどうですか？」

「（合羽も河童も関連してたりして）…」

「なんか言いました？」

「蟲の妖怪…氷の妖精…黒い帽子付き羽織袴…」

「むう…こつち（羽織袴）の方が明瞭メイリョウなのに、より謎が濃ゆいと
は」

「ああ何だ。チルノ経由？」

「聞いてないの？ 闇鍋同好会」

「余り闇鍋の事には触れないでくれないかな？」

「闇鍋は秘密めいてやるから闇鍋なんだよ？」

「な 何ですか その申し合わせた様な一字一句変わらない言い回し…」

「今年のテーマを”鳥”にしようかな？」

「永遠亭に呼びかけて、永夜抄同窓闇鍋会」

「姫さんが気にいったら、薬屋さんがきつと実現してくれるかも」

「ひッ！…」

「まずは一体イケるな」

「あゝ恙虫恙虫ツツガムシ…」

「陽が落ちそうなので帰りますね！」
「ご協力有難うゴサイマス！」

やれやれ。

むう！やっぱり今日？

じゃ予定通り、水無月闇鍋同好会ね

・
・
・
・

幻想郷にも、都市伝説と言つものがある。

伝説は秘密に始まり。

秘密に終わる。

秘密は伝説を産み出し。

秘密が守り継がれる限り、伝説であり続ける。

ルルル...

秘密を守護し、秘密を執り行う組織がある。

秘密結社

水無月闇鍋同好会

その活動は、絶対秘匿の上に催される。

水無月（陰暦6月）某日

夕闇時。

結社衣装である、漆黒の雨合羽をフードまでシッカリ羽織り、社員が秘密裏に集結していた。

「え〜皆様。今年も各々お忙しい中、お集まりいただき有難うございます」

普段は濡れてなんぼの河城にとりが、黒合羽を着て進行挨拶をする。

「では、早速総長のお話から」

「やっぱり堅苦しいよ〜ニトリちゃん」

「あたいに任せて!」

「総長のリグルちゃんです!どうぞ」

「ありがとう、チルノ」

「え〜と…じゃあ挨拶はそこそこに、新しいメンバーを紹介しますね」

「初めまして 諏訪子です」

「…ってのも、変な挨拶だけど誘ってくれて、ありがとう」

「いやいや、神様に参加してもらえるなんて」

「いつそ、総長を継いでもらうか、特別顧問になってもらっても」

「気を使わなくてもイイよー 私は新参だし、それに私のは大概、

事後報告だからねえ」

「私が総長なんて、悪い気がして…」

「ニトリさんは、言わずもがなだし、チルノは何と言っても発見者
「急に冷えたり、寒くなったりもチルノあつての風情だし」

「まあ確かに、妖精同士で行動範囲の広いあたいあつての発見だし
結成だけども」

「やっぱり愛があるのは、リグルちゃんと神様だよね〜ニトリちゃん
ん」

「そうだねえ〜」

「第一、いつどこに集まれば良いか決められるのは総長だけなんだ
から」

「そんな…う はう!」

「来る! 来るよ〜」

「知らせがッ 蟲の知らせがああ」

「遂に来るんだね」

「わたし見るの初めてだあ」

黒衣の妖精と妖怪と神様だけが知っている。

幻想郷の都市伝説。

闇鍋同好会とは、世を忍ぶ仮の姿。

その実態は…水無月に舞い来る、黒きリリーブラックを崇拜し…

秘密を守り、その恩恵を誰より早く独占的に賜うつと結託する秘密結社なのである。

お出でませー

お出でませー

お出でませー

おいでませええ

来る

来るうう

くるよおお

来たあああ！！

黒いリリー

「梅雨ですヨ〜」

水無月闇鍋同好会

「梅雨入りだああ
」

5巻：水無月幻想郷都市伝説（後書き）

黒いリリーを模した漆黒のアマガツパで、秘密を守り堪能する徒。

水無月闇鍋同好会

構成員は4名ですね

総長の

リグル・ナイトバグ

何気に幻想郷で一番、梅雨を愛してます。

蟲の知らせで、黒リリ出現の詳細が分かる。

副総長はチルノ

黒リリの存在と衝撃の能力（作者が勝手に創作付加）を解明した功
労者。

梅雨冷え、梅雨寒は彼女あつての風情。

活動進行役

河城にとり

言わずもがな。

新規結社員

洩矢諏訪子

蛙は大概事後報告。

黒いリリー

作者的にはリリーホワイトとは同一キャラ扱い。

だって、この設定にして亜種（別キャラ）じゃない方が、むしろ面白いのだもの。

「シンドローム」

6巻：梅雨に謀る人形師（前書き）

アリスのターン！

今季の梅雨時、

最後の狂宴

こんなポリウムで、お送りします。

お食事中に直前直後のご観覧には、御注意下さい（大げさ）

最後に、色々フィクションです

6巻：梅雨に謀る人形師

「早苗え〜」

梅雨入りを迎え、月の区切りも飛び越して間もない、妖怪の山。

守矢の境内

「早苗え〜、何処お？」

比較的涼しくなる山の高所にあつて、この神社も湿度の濃ゆい蒸し暑い日となっている。

タツ タツ タツ

そんな嫌気がさす不快な境内を、水を得た…いや、水氣を得た蛙みたいな活発さで跳び駆けている神様が、

「さッ・なッ・えええ〜〜〜いッ」

ッス ダー——ン！

「諏訪子うるちあい！」

守矢の神社の襖の先の表の祭神、八坂 神奈子のお怒りに触れていた。

「だって、こんなに日柄ひがひも良さげな遊日アソビヒ和なのに、早苗が全然来てくれないんだよあ?」

「麓の巫女じゃあるまいし、どしたんだろーって思うじゃ〜ん。神あ〜奈子あ〜」

「外にいた時から、そうだったけど、この時期になると俄然ウザくなるのは、相変わらずね」

「まあ、そんな事より早苗知らない?」

「早苗なら、遠隔操作な人形にお呼ばれ受けて、出掛けているわよ」
「何て言ったかしら? 魔法の森の魔法使い」

「魔理沙?」

「人間でない方よ。人形遣いの…マリスだっけ?」

「多分混ぜてるよ、その名前」

「まあ誰の事だかは、分かった」

「でも、珍しいね?早苗が遊びに出掛けるなんて」

「最初は断るつもりだったらしいんだけどね?」

「折角お呼ばれされたんだから、たまには友人の幅を広げに出掛け
ても罰は当たらないわ。って私が遊びに行かせたのよ」

「神様の御墨付きだ」

「じゃ、そろそろ暗くなるし、私が迎えに行つてくるよお」

「もし、入れ違いになったら、社にでも呼びかけてくんない？」

「あなた、一応土着神なんだけど 場所わかるの？」

「魔法の森あたりなら、最近行つたばかりだから大丈夫だよお」

「いつの間に」

「じゃ、お願いするわ」

「おまかせえ〜」

と、こんな陽気さで守矢の神社を飛び出した土着神様であったが、その人形遣いの家の異様な光景に、多湿度の陽気など吹き飛んでいた。

「こ…これは何事」

森の一軒家にびっしり取り付く人形の壁。

特に出入りする扉にあたる箇所集中された人形バリケード。

侵入者を拒むと言うより、脱出者を出さない為に抑えつけられているらしく、内側に向けてギューギューに密集されている。

ならば、何とか破れるかもしれない。

こんなのに限って、外側からの攻撃には、案外脆いものである。

でも…ヘタに派手なスペルを展開すると、中の早苗まで危ないかもだし。

かと言って、半端な弾幕は外側にも警戒される切っ掛けを与えてしまっ…

となれば

誰も見ていないし、早苗にも神奈子にも見せていない、あのスペルか

徐に長く距離を取り、片手を頭上へと伸ばそうとした瞬間！

電撃の如き第六感が神様を貫通せしめたッ！

「はっッッ！！」

「わたし、シンパシイイイイー！！」

「早苗がッ！早苗が呼んでるッ！」

私の早苗がッ 私をッ

呼・ん・で・い・るううううー！！

諏訪子様の目と帽子の目に爆発的な神力が閃く！

ッ　ッ　ダンッ！

帽子に片手を添えたまま、片足で脅威的跳躍！

長い滞空！ その中空にて、体が円盤投げをする為に反転し、目標物に背中を向ける体勢で着地。

その重力的、螺旋的衝撃力の全てが　童女の姿をした神様の添え手一点に凝縮された！

”ケロ符「帽子の中に、誰もいませんよ？」

「リグだルーアあああー！ー！！！」

ぶううーんッッ！

(窓) バリーーイン！

「よっしゃ！今助けるよお、早苗えええ！」

窓ガラスへの先遣襲撃を果たした神様は、人形犇めく扉に向かい全力疾走を開始した

ゆっくりと……扉が開かれ、恐る恐る中の様子を伺う様に入室する。

「い」じめん下さい」

可愛らしい西洋風の人形に案内されるままに、魔法の森の一軒家までやってきた風祝りの現人神、東風谷早苗^{コチヤ}。

「おつ、やつと来たぜ」

「これで巫女2人揃って巫つ女巫女だな」

初めて入るアリスさんの家。その緊張感を和らげてくれそうな、魔理沙さんの親しげな声が迎えてくれる。

まあ正確には、私は巫女ではないんだけど…

「馬鹿な事言っていないで、席詰めなさいよ魔理沙。この家、狭いんだから」

「あと、早苗は巫女とは言えないから、巫つ女巫女じゃない」

さり気なく聞き流せない事を言い出す、麓の巫女。

「それだと、何か悪く聞こえるんですけど…」

「確かに、巫女とは言えない怠惰な巫女には、言われたくないかな」

クッククック と、愉快そうに魔理沙さんが突っ込む。

「魔理沙うるさい」

「私のドコが巫女っぽくないのよ」

「私を見たら百人が百人、間違いなく巫女だと言っわ」

「あなたの格好の事じゃなくて、休んでばかりな生活態度の事よ？」

「早苗うるさい」

霊夢とのやり取りに、また魔理沙さんが笑い出す。

私も少し可笑しくなってしまう、気付けばスツカリ緊張感は無くなっていた。

「いつまでも、そんな所に立ってないで、まあ座れよ」
「もうすぐ、アリスが珈琲挽いて、豆運んで来るぜ？」

そう、今日は珈琲の飲み会招待状を持った人形が、八坂様の顔に正面からぶつかり、境内を掃除中ではあったのだが、「親睦の幅を広げる為にも、今日は遊んで来なさい」と、八坂様に勧められるまま、魔法の森に住む魔法遠隔人形遣い、アリス・マーガトロイドさん宅へと遊びに来たのであった。

「いらつしゃい、東風谷さん。招待を受けてくれて嬉しいわ」
「魔理沙、順番が逆よ？ 豆を挽いて、珈琲を運んできたわ」
「狭っ苦しくて悪かったわね」

4人分の珈琲カップを乗せたトレイを手に持って来たアリスさんが、招待客各々への挨拶と突っ込みと不平を一息に処理しながら、珈琲を置いていく。

私の前に珈琲が置かれる。

「いえッ 私の方こそ、誘ってくれて、ありがとっございませすー！」
「あの…どうぞ早苗と呼んで下さい」

霊夢の前に珈琲が置かれる。

「中身だけ広げる魔法もあるらしいわよ？」

最後に魔理沙さんの前に珈琲が置かれた。

「まあ、元は同じ豆なんだから大した違いはないぜ」

ウケ狙いなのか本気なのか

アリスさんも自分のカップを持って席に着く。

「
」

そういえば、魔理沙さんが頻りにアリスさんを気にしている。

怪訝な表情すら浮かべて、アリスさんを見ている。

…様な気がする。

気のせいだろうか？

アリスの住まいでの珈琲会は、時間を忘れた様に進んでいった。

「なあ、そう言えばお前が自分で珈琲運んでくるなんて珍しかったな？」

「
」

「そんなに、珍しいかったかしら？」

「私だって、お客様を持って成す時くらい、自分で働くのよ？」

「珍しいぜ」

「私だけ来る時は、いつも人形が運ぶぞ？」

「あら、あなた気付いてなかったの？」

「魔理沙が招かれて私の家に来たのは、これが初めてなのよ？」

「あれ？ そうだっけ」

「いま初めて気づいたぜ」

「別に突然来るのは、良いけど、たまに窓ガラス突き破ってくるのは止めてね」

「人形にガラス入ると危ないから」

「私が”じゃなくて、襲われる”魔理沙が”ね？”」

「魔理沙さん」

「神社でそんなマネしたら、宴会出禁だからね」

それだけは、ご勘弁をと慌てて霊夢に手を合わせたり、そんな冗談混じりの談笑に一息がつくと、徐に霊夢がアリスをジッと見据え。

そして、

「さてと　じゃ、アリスには、そろそろ本当の事を話して貰おうかしらね？」

「え？　珈琲会じゃ」

「早苗じゃ分からないだろうけど、アリスの家が不自然だらけだよな」

「不自然だらけなの？」

「おいおい。じゃ霊夢は何でアリスを疑うんだ？」

「決まってるじゃない」

「勘よ」

アリスが静かに席を立ち 招待した三人の来客を全員視界に入る様に正面の早苗の方へと顔を向ける。

「やっぱり霊夢には、敵わないわね」

「霊夢だけじゃなくて、私にも敵ってないけどな」

「霊夢が勘なら、魔理沙は何だって言うの？」

「ふふんっ この家ぐるっと見渡せば、不自然が一目瞭然だぜっ」

ぶんっ、と片手を振り回す様に、空っぽの棚に向けられる。

「お前の部屋に1体も人形 っあーっ！棚に人形が1個も無いッ！」

「何で今更、驚いてんのよ？」

「何度見ても、驚くもんなんだよ」

「何かどっかで、聞いた台詞ね」

何となくアリスの視線が霊夢の方に移ると…早く本題に戻れツ的な表情を浮かべていたので、コホンツと小さく咳払いで誤魔化し、話しの続きに戻る事にする。

「まあ、つまりはね」

珈琲を一口含み、気を落ち着けて。

「今日も朝起きて、人形も起こして、何時もの様に

「ふああ…、おはよお」

「はいはい、みんな今日も昨夜の雨でジメツとしてるから窓開けてえ」

「カビちゃうわよ」

「あれ、蓬莱？」

「それどうした…の？」

「何か黒っぽい…カビっぽい…大きな…」

トトトト

「ちよつと見せてツ」

「まさか、カビられたんじゃ

あ あ ああ ああ

あ あ ああ ああ…あ あ、そ そんな、ま・さ・かツ！

「嫌ああー！！！」

弾け飛ぶ程の勢いで扉が開け放たれ、大量の人形が野外へと飛び出す。

さながらダム放水の様な光景であった。

半分パニック状態になりながらも、人形一体一体が間違いなく扉を通り抜ける正確な操作。

そして、最後の一体の脱出と同時に、人形達により叩きつける勢いで扉が閉ざされた。

…可哀相に。その子（蓬菜）はショックのあまり自爆してしまったわ」

「なるほど。それで人形は、外で日干しなわけか」

「それでね。扉が閉まって、落ち着いてきてから気付いたの」

「まだ、私ที่บ้านの中に居たままだって事に」

「そして、アレもね」

「”あれ”？」

カシャンッ

珈琲カップが強めに置かれる音に魔理沙と霊夢が目を向けると、

早苗が立ち上がり、半歩ほど後ずさっていた。

「どうしたの早苗？」

「カビ恐怖症か？」

「あ あ、そんなアリスさん。嘘…嘘ですよね？」

「……」

「やはり外の現代人は、頼りになりそうね」

「色々期待してるわ」

「アリス。一体何だっただ？」

「人形が無いのは、分かったけど、後はさっぱりだぜ」

「魔理沙さんッ！多分、そう言う事じゃないんです！」

「…え…ああッ！アリスッ！あんた、まさか」

「そつよ。霊夢」

「つまり…」

ゆっくり酸素を吸い込み早口で一息に云う。

「暗い所や狭い隙間や人の目に付きにくい小陰やジメジメしてしたり
黴臭げな箇所が大好きで、陰気で根暗で粘着質で何でも食べて目
にするだけでも怖気がするのわそけに、ものツツ凄く速い蠢きで移動する
上に空も飛ぶ」

「アレが出 ガタッ！ダダダダ ダッ！ダンッ！」

一番遠くに居た魔理沙が真っ先に扉にぶち当たり、ノブに飛び付

く！

ガチャンツと体全体を落とす様に下げたその瞬間に霊夢、早苗が扉に体ごと突進した！！

ツダーーンツツ！

「あヴツ」

「痛アああ！」

霊夢と早苗が弾かれる程に渾身の激突をして、隙間程にも開かない扉。

すぐさま霊夢と早苗も、魔理沙1人が押し続けている扉に飛び付く。

ガチャガチャガチャ

ダンダンツダンツ

「あツかない！」

「アリス！ドア開けるよ、このおおおお」

背中扉を押し開けようと奮闘する魔理沙が、半泣きしながらも、アリスに吠えかかる。

「無駄よ？」

「人形が扉の向こうで、日干ししているから」

もはや、どんなに力一杯押ししても、扉は開きそうになかった。

「そんな事より、良くそんな所に居られるわね？あなた達」

「私なら扉とはいえ…絶対に壁際だけには近づきたくないわ」

確かに、これでもかと云う程に、壁（扉）に身を押し付けている三人。
アリスの言わんとする意味を察し、押すのを止めて固まる様に止まった時…

気のせいだったのかもしれない。

ただの思い込みによる軋みの誤認なのかも知れないが、確かに壁を伝い、三人の体に響き渡ってきた気がしたのだ。

カリツ… カサ…

総毛立つ三人。

ぞぞぞぞぞッ

「ヒゃあッ！」

弾け飛ぶ様に、アリスの元へと駆け戻る。

「アリスこの〜〜！」

パコンッ

「あう！」

駆け戻りざまの霊夢に頭を叩かれるアリス。
身の回りに人形も居ないので無防備である。

早苗は、忙しく周囲を見張りだしている。

魔理沙はというと、やはり一番早くアリスの足に取りすがっていったのだが、突然に叫びだした！

「ああー！ダメダメ！」

「私は、この中に居ちゃ駄目なんだああ！」

ガタンツと立ちあがると、髪がクシャクシャになりそうな程に、頭に手を走らせ、天井に向かって騒ぎだす。

「ま 魔理沙さん、落ち着いて！」

「何か分からないけど、こんな時には、私は居ちゃいけない気がするんだよおおお」

「私だけ、一番酷い目に会う気がするよおお！」

「今すぐ出せアリス〜！私だけ出せアリス〜」

「いたツ 痛い痛い！」

「魔理沙、痛いッ！」

「離してッ！」

激しくアリスに弾き飛ばされる魔理沙を霊夢が受け止める。

「あんだ、結局どうしたいの？」

「私達に何をさせたくて、呼び寄せたのよッ」

「ちょっと勘違いしているようね。霊夢」

「どうするのかって事ではないのよ？」

「重要なのはね」

「”私達が”どうにかするって事だと、私は思うの」

「アリスさん」

「それ、道連れに巻き込んだだけじゃないですか」

「自機が私だけじゃ成立しないから、主人公2人と、製品版より」

足早く早苗さんも巻きぞ…引き入れてあげたのよ」

自分勝手な言い分を挙げながら、三人の手荷物を掛けたりしている所に歩いて行く。

「でも見て。あなた達を呼び込んだお陰で、これ程の可能性が出てきたの」

クルツと振り返ったアリスの腕には、魔理沙の帽子が抱かれています。

「あつなるほど」
ポンツと手を打ち合点する霊夢。

「な なッ、成る程じゃないッ！」
大慌てでアリスに掴みかかりに行く魔理沙。

「返せアリスッ！」
ヒョイツ
あっけなく身を躲される。

「諦めて、魔理沙ッ」
「私達には、もうこれしか残ってないの！」

「離せ霊夢ッ、裏切り者おおおお」

霊夢に羽交い締めみたいな捕らえ方をされながらも、大暴れしていた魔理沙が、ピタッと停止して固まってしまった。

「魔理沙？」

「で でで…デカいの出たああ！」

魔理沙の指差す先に一瞬で顔を向ける早苗と霊夢、帽子を抱えたまま後退るアリス。

4人の乙女の眼前の扉に、紛れもないアレの、しかも恐ろしくデカイ姿が晒されていた。

ススツ カサ ススツ

数センチ区切りにスツ、ススツと移動するアレ。だが、その数センチ間の移動がおぞましく速い蠢きであった。

アレを直に目の当たりにして、アリスも早苗も魔理沙も霊夢も、完全に硬直している。

「ほ ほらっアリス！今よ！早くお逝きなさい」

ぐいぐいアリスの背を押す霊夢。

魔理沙の拘束は解けているが、帽子の危機にも反応出来ない程に固まっている。

「……ここ ココで会ったが百年目だわ」

ジリジリと扉に足先だけ近寄って行くアリス。

早苗も、魔理沙が気の毒ではあったが、正直異変解決には、これ以上無いアイテムだと思っていた。

そお〜つと帽子を上段に構えて近づくアリス。アレが、後一回でも動けば弾け消えてしまいそんな勇気を奮い、間合いに入るまで、もう1メートル

「も もう、これ以上は限界い〜 ここ ここから一気に飛び込んでやるわッ！」

「そのイキよ、アリス」

「ふあ ファイトです、アリスさん」

「私の帽子があ〜〜」

ゴクツ 最初で最後になるであろう千載一遇のアタックを前に喉を鳴らして、

『アリス！行きまーす！』

どっかで聞いた事ある掛け声で、アリス出撃！

∴その、気配の奮起がいけなかったのだろう。

ぶぶぶふううウーンッ

『きゃわあー！』

スカッ！ アリス、奇跡のグレイズ×1！

ブブブブブぶぶッ

『うわはヴッ！』
『イヤあああ！』
『ッはワッッ！』

グレイズ×4！

「アリスウ！あんた、何で避け　ガッシィッ！『だって飛んだのよ！だって飛んだのよ！』」

「わ　分かった！分かったから！」

「早苗！アレは何処？」

「あッ　あんな所に」

扉から床まで斜めに降下していたアレが、また壁まで移動していた。

「もう、帽子は絶対に渡さないからなッ！」

いつの間にか、魔理沙が帽子を奪取しており、形が変わりそうな程に抱きしめている。

「魔理沙ッ！それを渡しなさい」

「今度また、飛んできたらどうするのよ」

「うっさい！人のだと思って、こんな事に使われてたまるかッ」
「そんなにアレをどうにかしたいなら、私が霊夢ので成敗してくれ
るぜッ」

「あアッ！いつの間に！」

霊夢の大事な御被いのアレを持って、壁のアレに特攻をかける魔理沙！

気配にあてられたアレが、再び正面に飛び来る！

「うわッ うわわわッ」

羽根を全開にする悪夢の様な形態で魔理沙に舞い来る、梅雨の厄！

「負けるかああ！」

「魔理沙やめてええ」

魔理沙、渾身のフルスイング！

「リグダルアああああー！！！！！」

ヒュヴんッ！

スカッ！

アレのグレイズ×1！

魔理沙は豪快に空振りしたまま半回転し、

ぶぶぶッ…

ビタッ（背）「ひッィ」

（背）カサッ （腰）カササッ

「魔理…！」

フッ（失）・・・

バツアアーンッ！

「魔理沙ファンの皆様、ゴメンナサイ」

「ま り さぁー！！！」

魔理沙をピチユらせたアレが、三度壁へと待避するのを見届けてから、3人が駆け寄る。

「守れなかった…」

「また、魔理沙を守れなかったあ！」

「いつの事だか、分からないけどッッ」

悔恨に震えながら、魔理沙の顔に手を添えようとする霊夢。

スツと顔を通過して、魔理沙の帽子に伸ばされた。

「まあ、ソレはソレでコレはコレ」

帽子を手に立ち上がるうとした霊夢が、帽子に秘められた魔理沙のとんでもない隠し玉に気付いた。

「ああッ…これは…」

「魔理沙あんた、こんな物ボムを抱えて堕ちてたなんてえ！」

魔理沙の帽子の中から、それはもう大量の文々。新聞が出てきた！

全ての新聞に、魔理沙の写真付きの記事が、掲載されていた。

アリスが新聞を手にする。

「魔理沙あゝ、こんな悲しい事をしていたなんて」

「そうと知ってれば、もっと構ってあげたのに」

霊夢も新聞を手にする。

「鴉が号外撒いてた時、ワザワザ見せにきたのは、そう言う事だったのね」

「なんやかんや付き合いの長いアリスと霊夢が、新聞を手に手に持ち、

『こんな紙が有るから、魔理沙が内根暗ウチネクラな子になるの!』

2人して、一気に新聞紙を固めてしまった!

丸くではなく、棒状に。

それも、割と丁寧に。

クルクルクルツ

「そ それは、魔理沙さんの大事な物じゃ……」

「聞いて早苗!」

「古今東西、最良の敵討ちと言えば、討たれた友の武器で果たされるって決まり事なの」

「はい!早苗さん」

アリスが、友の武器を早苗に託す。

「あ どうも」

「さあ！霊夢に早苗さん」

「いま巫女揃い、魔理沙の心が宿ったわ！」

「巫つ巫女にしてやりなさいッ」

ビシツとアレを指し奮起の怒号をあげるアリス。

『おおー！』

呼応する巫女2人。

お・前・も・な・ん・か・し・ろッ

スパパーン！

「あうッ」

アリスが真っ先に、巫つ巫女にされた。

ぶぶツぶうウウ〜ン

無駄な遣り取りがアレを刺激したのか、家中をむちゃくちゃに飛び回るッ

ブウウ〜ン

ブウツ ぶんツ ぶう〜ン

「ひゃんッ」

びゅん スカッ

「ひいッ このッ」

びひゅん スカッ

半狂乱でむちゃくちゃに新聞紙を振り回すが、全く当たらず、パニックは激しさを増していく。

アリスは頭を抱えて、しゃがんでしまい、震えて動けなくなっている。

ダンッッ！

「あううッ」

ブンブンに振り回しながら右往左往している内に、早苗の新聞紙がすっぽ抜けて、体は扉と向かいの壁に激突してしまった。

「早苗えッ」

「はわッ はわわわッ」

「来ないでええッ」

絶妙な1メートルちょい程度の距離感でピタッと着地したアレが、気まぐれな感覚で早苗に近付いていく。

「さ 早苗さん！逃げるのよー！」

「このままじゃ、早苗が恐ろしい事にッッ」

段々近付いてクル

近付いてクル！

ササッ カサササッ

「ヒーイッ…やさッ 神奈子さまあああ！」

…カサッ

「早苗さん！」

「早苗ッ！」

「嫌だあああ！」

(窓) バリーーイン！

その時ッ！ 扉側の窓ガラスが激しい破裂音を鳴らし割れ、何か帽子の様な物が飛び込んできたッ！

「あれは諏訪子様のッ」

帽子は、まるで意思があるかの様に早苗とアレの方へと飛翔し…

三人は確かに見たような気がした。

蛙の顔を連想させる様な帽子の中に、ただならぬ気配を発する2ツの閃きを…

守矢神社のどちらの祭神とも異質な気配を発する帽子が、早苗に近づくアレを認めた途端、物理的に非常識な速度でアレに落下！

ビッターーンッッ！

っと、もの凄い音を立ててアレに被さったと思ったら

ゴッ キュン！

ハッキリとした、何かを呑み込む音が帽子から鳴り、完全に沈黙した。

そして、パパパーンと破裂音が扉のあたりで鳴り、扉が激しく開け放たれた。

「早苗えええ！」

「助けに来・た・ぞお」

「諏・訪・子・さ・まあああ〜〜！」

ガバツと飛びつく早苗。

・
・
・
・
・

「まあ、早苗が無事で良かったよ〜」

「そ　それは、何よりですわ」

部屋や棚に人形が戻され元通りのアリスの家。

そして、すっかり弾幕を浴びた程度にボロボロのアリス。

「自業自得ね、アリス」

未だ昏倒したままの魔理沙を、外に立てかけてあった箒ごとフワフワ浮かせて、霊夢が運ぶ。

霊夢は自分以外にも色々な物を浮かせて運べる。

「じゃ、帰ろうか早苗」

「そろそろ帽子返して?」

「ツツ駄目ですっ!」

「何でサ?」

「駄目ッたら駄目です」

ブルブル震える手で、帽子を持つ早苗。

アレをこっきゅん した帽子は、触れているだけでも、気持ち悪くて耐え難い。

…が、それ以上に諏訪子様が被る事だけは、絶・対・に許諾できるはずがなかった。

「あ! アリスさん、外の世界に伝わる、とても大事な格言を御存知ですか?」

魔理沙と霊夢、諏訪子様と早苗が扉から出て、夕日を浴びながら、早苗だけが振り返り、屋内のアリスに声をかけた。

「何かしら?」

「ゴキブリを1匹見たら50匹は”いる”と思え」

『えッ!』

(扉) バターンッ

6巻：梅雨に謀る人形師（後書き）

はわー！

何とか梅雨明けに間に合ったああ！

6月中には出せるかな？とか、何となく思っていたけど全然無理だった

そして、この文字量…

なんで、段々連載していく度に、文字量増えるんだろ？

ちよいネタは、ちよいネタらしく、気楽な文量でいこうよおと、自分に言って聞かせる所存です。

ツツド　　ヴウン

ブリツbiriziziziii!!!

耳の中身を劈く様な、ヒビ割れた轟音。

局地的な薄紅い爆発球が爆ぜ咲く度に、全身を戦慄とショックに畏縮されざるを得ない破壊的で暴力的な爆破音が発生する！！

オト。オン。などと言う様な生易しいモノではない。

強いて例えるならば、それは…

現実的には決して開いたり割れたりする事など有り得る筈が無い空間を、常識も法則も無視、いや、常識も法則も破壊して裂き壊した時になら発生しそうな

そんな、音速で喰らい来る、風圧すら裂き割る大気の破壊波。

その時、生けとし生ける存在の神経や細胞は鮮血の嵐と化し、中の人らを三途の岸に飛ばして、今生の活動を終える事でしょう。

そんな、恐ろしい狂気な爆発音が、球体状に開花する紅い空間内で起こっているのだッ！

いるのだあツと、迷いの竹林中に響き渡る声を発しながら、紅い瞳を目一杯広げて逃げる者を追走するのは、永遠亭に住む、月から来た兎。

レイセン
鈴仙・優曇華院・イナバ

『だから、当たったら酷い事になるぞあ』
『酷い事になる前に、止まりなさい』

言いながらも、爆音混じりに紅い球体を爆ぜ咲かせる、小さい種のような弾幕がバンバン射出されていく。

その先には。

「レイセンのお〜」
「嘘つきウサギい〜」

鼻歌混じりに弾幕からひよひよいひよい逃げては、余裕半々焦り半々な表情で脱兎する、薄いピンク色のワンピースを着た、小さな妖怪兎。

「そんな嘘なんか通じるわけが無いじゃ〜ん」
「鈴仙の幻覚なんか、怖くないよあ〜〜?」

鈴仙と同じく、永遠亭に住む地上の妖怪兎、因幡てゐは今日も元気に活動していた。

ぴょん、ぴょんと迷いの竹林を跳ね回り、時には飛翔し、諦め悪く追撃してくる鈴仙の弾幕を避けつつ逃げる。

てゐの避け抜けた後には、大音響と紅く球体状に歪まされた空間が次々と生じては、軽い歪みとジジジツと残響を残して消失する。

しかし、そこら中で発生する紅い弾幕は、高く聳える竹の一本も、微風にも揺れザワめく笹の葉一つも揺らしはしない。

そう。紅く爆ぜては、てゐの背後で大爆音を生じる弾幕は、”鈴仙の幻覚”と、てゐが称する通り現実を起こっている事象ではなく、鈴仙の紅く開かれた狂気の瞳を見てしまった者が視せられる、精神波による強力な幻覚。

幻覚ではあるのだが…

同居人である妖怪兔を猛然と追う鈴仙曰く

『幻覚だからこそその恐さ、知らないのかしら！』

『強力過ぎる狂気は、現実をも超越する！』

強力な自己暗示や催眠は、精神に留まらず肉体にまで影響を及ぼす。

水を手にとり、熱いと感じさせるだけではなく、暗示の深さによつては実際に火傷の様な炎症が皮膚に現れる事があるのだ。

ならば

ならば、それが絶大で強力過ぎる、狂気の紅い幻覚であったなら!?

『私の幻視幻聴は質量にも物理的限界にも縛られず、てゐの精神で超絶ッ無比にッ…!』

てゐの動きを冷静に先読みした鈴仙が急停止して狙いを定める。

人差し指を真っ直ぐ伸ばすと、片手で半身に構えるのではなく、両手を体の真正面で組み、大口径の拳銃を表現する様に左右の人差し指を合わせて構え

『壊レ咲クツツ!?!?』

紅い狂気の両目を大きく開いてカッツと狙い付けた先に、渾身の弾撃が撃ち出された!

「ほやッ?」

今までで一番大きな射撃の幻聴に意識が向いた瞬間、自分の逃げた先へ軌道を合わされた弾幕が眼前に、顔面に、飛び込んでいた。

凶悪に爆ぜ散ろうと紅く歪み閃く幻矢に、てゐがひきつり笑う。

「ちょ まっッ」

カッツッ!?!?!!

紅くボヤけ歪んだ灼熱色に爆ぜ咲く弾幕球

てゐのド顔面にクリティカルヒットした所を中心点に壊レ咲ク弾
幕球

その幻聴幻視の威力の様は

因幡てゐのみぞ知る

ぴちゅ
ン

『要は、暗示と思ひ込み次第ってねえ』

兎と兎の追いかけてこを勝ち取った月の兎が上機嫌で、弾幕ごっこに敗れた程度に突っ伏すてゐに駆け寄る。

近づくと。

てゐの小さな体が小刻みに痙攣していた。

人妖の内面世界に働く攻撃の在り様は、物質や質量に縛られず、限界もない。

そして、当人がどれ程の狂気を受ける事となったのかを、真には当人しか知り得ないのだ。

真には、術者にすら知り得ない。

てみを追い込んだ紅い瞳を大きく広げ、涙目でてみを抱え起こす
鈴仙。

てみは、ぎゅっと目を閉じて躰をのたくらせている。

『てみ！目を開けてッ』

『目をッ』

『私の目を見るのッ』

『すぐに解いてあげるからッ！』

てみは、ぎゅうウウッと強く目を閉じたまま、頭に添えていた両手をとても苦しげに震わせて鈴仙の方に伸ばし、まるで抱っこでもせがむ童の様に鈴仙の肩の辺りや、顔や頭の辺りを右往左往。

『てむっしむっし』

『てむっしむっし』

もはや鈴仙に為す術も無く、てみを更に抱き寄せる事しか出来ない。

てゐとの距離が更に縮まり、伸ばされる両腕が鈴仙の頭の辺りに触れ、力無く手繰る。てゐの掌が、ぴんツと真っ直ぐ伸び立っている耳の後ろ側を、儂げなくらい添える程度に触れられた瞬間だった。

ふわぁ　と、急にはなく緩やかに優しげに　てゐの瞳が開く。

「ウソうさ」

てゐの両の手に添えられていた鈴仙の耳が、物凄い勢いで内側に引き倒されッ！

バッチィ　ンツ！！！！

大きく開かれていた紅い両目に、クリティカル・オウソールツ！！

『はウツ！！』

『目がああああ〜』

グわウツと堪らず仰け反り昏倒する鈴仙。

衝撃的な攻撃を受け、頭の中は開こうとする度にジィッーンツと痺れる痛みと、混乱のハテナマークで一杯だ。

「一度、言ってみたかったんだよねえ」

そんな一言と、てゐの土を踏む足音が段々小さくなっていく

もう

足音しか聞こえない

少し離れたら聞こえなくなってしまう距離で、

置いてかれる。

そんな寸前に……

「ありがと」

てゐの声が、また聴こえた気がした。

そしたら何故か、怒りが消えていってしまふ。

心なしか瞳のジンジンする痛みも消え去った気がした。

まだ、てゐの背中が見られるだろうか？

ジッシーンッ！！！

だから、目の痛みも無くなってよぉ〜！

・ ・ ・

永遠亭

『お師匠さまぁ…』

「うどんげ？」

「何処行つてたの？」

「今日は珍しい患者　　って、寝てましたって顔してるわねえ」

呆れ顔を浮かべている永遠亭の薬師さん。

鈴仙の師事している八意永琳は、自ら考案した優曇華院と言う鈴仙の愛称を親しげに崩し、うどんげと呼ぶ。

しかし、時にお師匠様の”うどんげ”は、その呼び方の優しさに二倍率な反比例さで、一寸先の熾烈なお説教を暗示させる。

今の鈴仙は、特に声色だけが頼りだった。

「まだ、寝足りてないみたいねえ？」

ふ 普通かな

それは勿論、本気で鈴仙が寝坊しているとは思っていないからなのだが、鈴仙の預かり知る所ではなかった。

本人が自覚している以上に、鈴仙のナリはボロボロ。

いつも綺麗な紅い色を見せる瞳は、少し瞼から覗かせようとしては、すぐ頑なにギョウツ！と閉じられるのを、頻りに繰り返している。

（目が開かなくなつて、遠方から何度も転んだりブツかったりしながら、生傷こさえて帰ってきたってトコかしらね？）

それが、患者の額に妖精にも効く（もとい効きそうな）薬草ガ―ゼを貼っ付けながら推察した、うどんげへの結論だった。

『てゐが…てゐが非道いんですよ』

「てゐと喧嘩して、やられたの？」

『喧嘩じゃないです』

『てみを追っかけてる内に、弾幕戦になって…』

「逃げられたのね？」

『結果的には…』

鈴仙の耳に、ふう　と、ため息が聴こえた。

「そもそも、なんで追っかけてたの？」

『てみが、私の顔見るなり逃げ出すからです』

「…それは追っわね」

『追います』

師弟の頭に、様々な薬種の調合と保管を兼ねるラボ（研究室）が浮かぶ。

「うどんげも5ボスなんだから、シッカリしてくれないと困るわ」

『”5ボス”って何の話ですか？』

「この子の応急処置も済ませたし…どれ、目を診せなさい」
「何をされたの？」

「目にスペルカードでも、刺されたの？」

『目にスペカを!!!?』
『いえ…流石にそこまでは…』

未だ、痺れる様な痛さの癒えない目を、少しだけ開けてみる。

!!!?
痛いッ 痛いいゝ

でも頑張って薄目だ。

少しずつ霞んだ視界が認識し易くなってきた。

すると、お師匠様以外に2人ほどの小さな誰かが居る。

そう言えば、珍しい患者が来ると、お師匠様が言ってた。

それらしい物音一つ聴こえなかったので、完全に失念していた。

あれ?
って言うか、患者って妖精ですか!
これは本当に珍しい。

一人は、色んな季節の花々が一斉に咲いて、居なくなったてゐ

捕まえに行つた時に初めて会つた、氷と冷気を操る程度の妖精だ。

凄い興味津々な表情で私を見ている。

その隣では、オドオドした感じで氷精（確かチルノ？）の腕にしがみ付いている緑色の髪な妖精が、額にガーゼ貼っていた。

この子が患者さんか。

あ もう、限

ジクンツ！ジクツ！

『~~~~~』 いッ

ぎゅうううッ

「.....」

「痛そうねえ」

『痛いです』

「本当に何されたの？」

『あの 耳が』

「耳？ 目でしょっ？？」

『私の耳を目にぶつけられましたッ!!』

自分のうさ耳が

・・・目に。

「それは き 奇抜な攻撃を受けたわね」

お師匠様の声が震えていらっしやる

「 耳が？ ぷっ！」

「 あっはははははは 」

「 ち チルノちゃんッ 」

「 駄目だよぉ〜！」

永琳が振り返ると、氷の妖精が指差して笑っていた。

『・・・』

「 大ちゃん聞いた？」

「 弾幕ごっこしてたら、自分の耳が、自分の目に当たったんだって

え
」

「ぷつ ふふふッ」

遂にお師匠様にまで、笑われた！

「あたいッ！ あたい、あの長耳見てて、いつかヤルんじゃないか
ヤルんじゃないかって、思ってたんだよねえ」

「チルノちゃん止めようよ」

「怒られちゃうよ」

『もう好きに笑ってえ』

妖精に指差し笑われ、羞恥と目潰しの痛みに、赤面して震える優
曇華院の姿は、流石に痛々しかった。

早々に処置して目が開くようにする為に、永琳は目に効く洗浄液
を薬棚から取り出す。

「その程度で、そんなに痛みが取れないのは、目にウサ耳の細かい
毛が入ったからよ」

洗浄液の容器の蓋を開けたら、片手を優曇華院の頬に添えて、上
を向かせる。

今度は同じ手で、頑なに閉ざされた瞼を一気に開いてやって、固定した。

両手をわたわた動かしているが、そんな事に一々気を回しては治療など出来ない。

八意印の洗浄液が入った1.5リットル容器をそのまま瞳に近づけていった時、弟子の動きが止まった。

『お師匠様　まさか』

「これで異物がすっかり流れるから安心なさい」

「もし、耳の毛が入った事が原因でなくとも、コレで色々流れるから」

『おッ　お師「それから、絶対に口の中に入れては駄目よ?」』

「例えば目からビーム出てる幻覚とかが、永遠に止まらない様になっても知らないからね」

微塵の躊躇も無く、目の真上で容器を傾ける。

だばだばだば

だばだばだば

『!!!!?』

『!!!!!!?』

服がびしょびしょになるうが、床がビシャビシャになるうが、兎が身振り手振りで暴れてようが、目の洗浄を続ける。

容器の中身が大体半分程まで減った頃合いになって、容器の傾斜が戻され、瞼を開いていた手も離す。

そして、口を堅く閉じたまま、肩で激しい呼吸と興奮を主張している兎の弟子に、大切な言葉をかけてあげた。

「今度は右目ね」

だばだばだば

だばだばだば

『ししょ ツ! はぶぶぶぶツ!』

「ほら、喋ると危ない」

「少し口にいった?」

「まあ 多分、大丈夫でしょう」

うごんげいんの暴れ具合は、皆様の心の中にあります

「はい、終わり」

洗浄液の容器は、完全に空となっている。

『……………』

「まだ痛むの？」

『……………あれ？』

おっかなびつくり瞼を開けてみると……………

『すっかり痛みが無くなっていますッ』

『と言っていますか、何で服が……………』

服も床も元から濡れてなどいなかっただかのように乾いているのは、
文脈ごっこを展開出来る程度の誰かの都合なのか？

それとも……………

『私、少し飲んじゃってるみたいなんですけど　大丈夫ですよ
？』

「目が明るく様になったのなら、早くこっちを手伝いなさい」
「もたもたしていると、華の名は取り上げて、三眠夏院みみんげいんって愛称付け
るわよ？」

いつの間にか書かれたのか、読みも当て字も不名誉極まりない改称
候補が紙面で提示され、目の前でヒラヒラ揺らされる。

「みみんげだと語呂悪いし、呼ぶ時はみみげね」

『耳毛は嫌です〜!!』

『直ぐに職場復帰しますから、みみんげいんだけはお許しを〜!!』

・
・
・

∴　・　そんなわけで。

今から私は、見習い薬師の優曇華院ではなく、永遠亭の診療助手の
レイセンです

と言っても、上から白衣着て、”鈴仙”ってネームプレートをクリ
ップで付けただけですが。

「み　うどんげ」

「しっかり記録を付けておくのよ？」
「この前のは、要点の重視し過ぎで、ただの箇条書きみたいだったわ」

『えっ！』

『すいません。気を付けます』

（いま 呼ぼうとしてました？ みみげって呼ぼうとしてました？）

永遠亭にお師匠様の診療目当てのお客さんが来た時は、その問診や診療過程を記述するのが、主な私の御役目です。

え〜りん診療日誌です。

姫様が、そう言う題名にきなさいと。

今回の患者さんは、緑色の髪な妖精です。
冷気を操る程度な妖精チルノと一緒に居るのを見たことがあります
が、そのチルノと付き添いで来たようです。

「じゃあ、取りあえず応急で、手当てはしておいたけど」

「一体どうしたら、そんな事になったのか教えてくれるかしら？」

額にガーゼ貼られているから、額に怪我おったのね。

ぶつけたのかな？

妖精なら、その程度じつとしてれば自然に治ると思うんだけど。

「うごんげ」

「この子の頭に、包帯巻いてあげなさい」

「ガーゼが汚れてしまわない様に」

『はい』

相当怖いらしく、私が包帯持つて後から少し触れただけで、患者の妖精が物凄く震え出します。

『 そんなに、恐がらなくても大丈夫よ?』

『 とつて喰ったりするわけじゃないから』

「 そうだよ、大ちゃん」

「 こんな妖怪、私に比べたら全然大したこと無いんだから!」

『 あんたはとつて喰つてやろうか?』

「 うごんげ」

「 患者を恐がらせない」

「 問診の妨げになるじゃないの」

・・・怒られました。

念入りに丁寧に包帯を巻いてあげながら、患者の妖精は語り始めました。

後で、診療日誌に記録するので、私も良く聴いておきます。

大妖精、談

まさに妖精な怪我

朝に目覚めたばかりの時に、まだ少し眠くて頭の中がぼけえ〜つとしたり、ぼ〜つとしたりする事があります。

”寝ぼける”

と言っそうです。

今朝、チルノちゃんに寝ぼけるが起きました。

「ねえ、ねえ！」

「あたい、大ちゃんに聞きたい事があるんだ」

「あ、チルノちゃん、おはよー」

「聞きたい事？」

「弾幕ごっこって、どうするんだっけ？」

「え！？」

チルノちゃんが寝ぼけて、弾幕ごっここの仕方を忘れました。

「何か花とか投げれば良いんだっけ？」

「花は投げちゃ駄目だよ！ チルノちゃんッ！」

本当に花をもぎり取るうとするので、慌てて止めました。

「えっとね 弾幕ごっこは」

「えっと」

「チルノちゃんの場合は 冷気をね 冷気を集めて」

「冷気 そうだ冷気だ」

「あたいうってば冷気を操って、弾幕にしたり出来るんだった！」

「そう！」

「その調子よ！ チルノちゃん！」

「あたい、だんだん思い出してきた！」

「あと、まだ大切な何かがあった気が」

「後は」

「チルノちゃんの場合は、スペルカード？」

「そっこだ!？」

「あたいのスペカ!」

「あたいつてば、全部思い出した!」

「冷気を操って作った弾幕で攻撃して、最強スペカでトドメを刺すのが、あたいの弾幕ごっこだ」

「思い出せて良かったね、チルノちゃん」

「うん　ありがとー大ちゃん」

「うふふ」

「どう致しまして」

「じゃー、さっそく弾幕ごっこしよー」

「コツを取り戻す為に、大ちゃん宜しく」

チルノちゃんが突然凄い事を言い出しました。

「え? えッ?」

「無理だよー!?!」
「チルノちゃん!」

「あたい、ちゃんと思いついたんだ」
「あたいは1中ボスで、大ちゃんは2中ボス」
「なんと!大ちゃんの方が、あたいよりも格上のだったんだよね」
「」

「チルノちゃん!」
「お願い!もつと色々思いついてツ!?!?」

「スペルカード!」
「お〜ぷん」

「ひいッ」

「えいッ」

ヒュカツッ!!

「.....」
「チルノちゃん」
「スペカは、こつ使うんじゃないと思つたよ」

「・・・うん」

「あたいも、やった瞬間、アレ？違うかも？って思った」

「って言うか、いま色々思い出した・・・」

「何かごめんなさい」

「大ちゃん、大丈夫？」

「うん」

「だいぶダメ」

・・・ばたん

スペカが外れて、何か色々吹き出してきました。

「大ちゃんああん！！」

「あ あわわわわッ」

「そ そうだ！ あたい知ってるよ！」

「こういう時は、抜いちゃ駄目なんだよッ」

「戻・さ・な・きゃ」

「うッ！」

ここで、完全に意識が無くなりました。

・ ・ ・

お師匠様が、笑顔でコメントに困ってます。
「……………」

「何と言うか」
『まさに妖精ね』

「え？ あたい達、妖精だけど」
「いま気付いたの？」
「馬鹿だな」

こんなのに、笑い物にされてた私って

あ、因みに包帯は巻き終わりました。

「まあ、基本的には安静にしてれば、治癒するとは思っけど」
「一応、患部にドクダミ草の有効成分を良く染み込ませたガーゼを貼っといたわ」
「植物の加護だから、多分妖精にも効く筈ね」
「傷痕も、残ったりしないと思うから安心なさい」

「はい、本当に有難うございます」

「本当にごめんね」
「大ちゃん・・・」

「うっん」

「気にしないで、チルノちゃん」

「チルノちゃんに、ここまで運んでもらえたから、助かったんだもん」

「いい娘だ！ この娘、本当にイイコだ！

爪垢煎じて、てみに飲ませたい！！？」

「うん！あたい頑張って道思い出して運んだ！」

「そうか。」

「てゐの案内無しで・・・」

「そこは褒めて良い。」

「よっぽど、大ちゃんとやらの普段の行いが良かったんだ。」

「でも、今回は本当に運が良かったのよ？」

「あなたは、もう少しで大変な事を友達にしてしまう所だったって事を、良く自覚しなさい」

「お師匠様が、氷の妖精に警鐘を鳴らします。」

「うん。あたい　もう少しで大ちゃんに大変な事をしちゃう所だった」

「まあ・・・もう、十分大変な事していると、私は思うんだけど。」

「今回は、氷符の”アイシクルフォール EASY”だったから、事無きを得たのね」

『そ　そう言う問題なんですか？』

「もし後2段階程、上位だったら」

「だ　だったら？」

妖精二人が、緊張した面持ちで、お師匠様の話に聞き入っている。

「頭蓋骨や脳に達するどころか、存在にまで達していたわね」

「存在にまでッ!？」

妖精が揃って叫び、あわあわと、慌ただしい反応を返している。

そして、

この直後でした。

とんでもない来客が、突然乱入してきたのは

「た・の・もー！」
「永琳は居るかーッ」

『あぁッ！？』
『あんたはッ』

藤原妹紅の登場だ！

更には、そいつの小脇をすり抜ける様に、現れたのは……

「お師匠さまぁ〜」
「患者さん連れてきましたよぉ〜」

『てゐ！！』
『あんた今迄何処に』

「まぁまぁ」
「患者さんが先、患者さんが先」

『患者つたつて』

「患者さんの容態は、だいぶ重傷」

「ほ 本来なら、こんな所に頼りたくは無かったんだが」

「お前になら、どうにか治せるかもしれない！」

「頼む！」

「慧音をどうにかしてくれええ〜」

「妹紅お〜」

そう言われ、藤原妹紅に手を引かれ入って来た患者さんは

里の寺小屋で、教師として働いている。

半人半獣の上白沢慧音さんだったのです。

t o b e c o n t i n u e .

>

二部構成つてやつを、やってみたくなつた。

あと、今回、主人公的な方のセリフを『』で統一してみました。

そう云えば、

前巻の後書きで、もっと気楽な分量でいく様、自分に言い聞かせてみたので、期待していたのですが・・・

「期待した結果が、これだよ！」

そんなわけで、次巻の巻物語は

〈End of The Eirin Medical Diary
です

最後に、永い永い未更新を謝罪致します。

思い返せば

今日は色々散々な目にあってきた。

鉢合わせした途端、挙動不審全開に逃げ出すてみを追いかけては、非道な騙し討ち（暫くトラウマになりそう…）を受け、両目を塞がれたり逃げ切られたり。

目潰された身で、あっちこっちらブツかりながら、やっと永遠亭に帰ってきたら

師匠に寝てたと言われ、変な名前に改称されかけ

妖精には笑われ辱められ

目の痛みも、服と床の汚れも水気さえも流し去る何かが 口に入る。

大丈夫。

…うん、私大丈夫。

心なしか瞳孔が暖かいけど大丈夫。

それでも、この患者さんの被った受難よりは、幾らかマシであったと思います。

最初はどこが、どう重傷なのか分かりませんでした。

外見には特に目立った外傷も見られず。

当の患者さんにも、特に苦しげな様子も認められません。

しかし、藤原妹紅に「どうかかしてくれ」と連れて来られた患者さん。

半人半獣、ワーハクタクの寺小屋教師。

上白沢 慧音さんが一言口を開けば、即座に異常性の大売り出し。

重傷と言うか、重症？

「お師匠様　これは、もしかして　」

師匠は、困った様な声色ながらも笑顔で表情固定したまま、ヒソヒソと小声で返してきました。

「もしかしくとも、てみると私の薬が咬んでるみたいね」

「ですよね」

私も、患者さん等に気付かれない様に小声で。

ん？

あれ、何か違和感が。

「あー… あ、あ〜」

「うどんげ？」

「何をしてるの？」

私が唐突に喉に手を充て、あーあー言い出したので、訝しがられます。

「あ、いえ、何でもありません」

私と師匠が、てゐの方に視線を向けると、てゐはサツと視線を外し、手を頭の後ろで組みながら掠れた口笛吹いて誤魔化してます。

何なの？ そのベタな誤魔化し方は。

「全く うどんげが頼りないから、保管室ラボのセキュリティ強化も考えないといけないみたいねえ」

「め 面目ありません」

「でも、ラボのセキュリティ強化は、した方が良くと思います」

「それは無理ね」

「な 何故ですか？」

「そんな事したら、貴重な治験データを得る機会が無くなってしま
うじゃない」

「お師匠様・・・」

治験チケンとは、薬の安全性や効果の程を実地での投薬によって検査す
る事です。

つまり臨床試験です。

師匠・・・

「おい！」

「お前ら、さっきから何をコソコソと話してる」

「早く慧音を診てやってくれよ！」

しびれを切らした付き添いの妹紅が、ガーンとまくし立ててき
ます。

五月蠅いなあ

診療室では静かにするものよ？

「えっと、じゃあ慧音さん？ もう一度、落ち着いて説明してもら
えないかしら？」

師匠は、そう言いながらチラッと私に一瞥向け、鋭い眼差しで合
図を送ります。

はい。

治験の記録ですね？

お任せ下さいお師匠様

こうなったら、もう気にしてても仕方がない。

永遠亭、八意永琳の弟子らしく！

堂々とした態度で、こっそりと治験の記録をとりましょう！

そして慧音さんは、我が身に起こった顛末を語り始めます。

一生懸命、身振り手振り付けて語ります。

師匠も親身になって聞き入っています。

隅っこの妖精達も、圧倒された様子で聞き入っています。氷精の背中で小さくなっていた、患者の妖精までもが呆気に取られ見入っています。

慧音さんの、勢いに満ち満ちる説明には、それだけの熱意！と云うものが感じられました。

私も半ば圧倒されながら、予め手にしていたノートに、まず最初の一文を書き記していました。

効果は絶大

・ ・ ・ ・

サクッ

サクッと、

竹林の地を踏み進んでいく兔の足音。

兔追いし兔を謀り、ご満悦で二足歩行する永遠亭の妖怪兔。

因幡てゐは、今日も元気に活動していた。

さて と、

家の兔も追っ払ったし。

コレは、どうしてくれようかなあ

ラボから持ち出してきた永琳の新薬を手に、因幡の足取りは更に

軽く、春っぽくなる。

因幡の右手に薬の容器、左手には容器にゴムで括り付けられていたラベルが握られている。

そのラベルの裏側には、薬の用法・用量、効能と使用目的、注意事項等、実に事細かな取扱い説明書となっていた。

これはつまり、

そういう事だよねえ

上機嫌にスキップを始めて、錯覚の解けているはずの竹林をどんどん進んでいく。

「私なら、もっと面白い事に役立てられるよ」

「……」

なッ！！？

てゐは突然ビタツと停止すると、恐る恐る喉に手を充てる。

「あー」

「あ、あ」

「……」

「私の台詞が二重鉤カッコじゃ無いいい!!」

鈴仙もお師匠さまも普通だったら、次は当然私じゃないのッ!?

そうか。

もう、そういうの終わってしまったのか。

軽い落胆を振り払って顔を上げると、竹林の中に見覚えのある開けた場所と、簡素な印象を感じさせる家屋が建っていた。

あ。あの家は。

正直、出来るだけ関わりたくない奴の住処だ。

そんなに特別、苦手意識を持っている訳でもないのだが、こここの家主の生業もあって、あんまり冷やかしが過ぎると素焼きの丸焦げ兔にされてしまう。

触らぬ妹紅に火傷無しと云うことで、そつと後退しながら、視界からも外してしまおうと後ろを向く寸前で

窓の奥に、あの人の紺色帽子が動くのを見た。

ギンツ!と目の色を変えた悪戯兔から一切の足音が鳴らなくなり、

今日の遊び場へと

低空飛翔で突入だ

妹紅の家

うむっ

これで、準備良しっつと。

まず、妹紅が湯浴みから帰ってくるだろ。

そしたら、テーブルに冷水のポットと、コップが2個置いてあって。

『おおっ、慧音』

『来てたのか』

瞬時に右側へ

『喉渴いてるだろ妹紅』

『トクトクトク〜』

目を瞑りながら、優雅にコップに注ぐ真似事。
そして、左側へ

『うわゝ、なんて気が利くんだ！慧音え』
『大・好・き・だー』

右側へ

『私・も・だー！』

『かんぱ〜い！』

で一緒にゴクゴク〜と、いくわけだ。

か 完璧だ。

慧音が精神世界から物質世界へと無事帰還を果たすと、永遠亭の妖怪素兎が2個目のコップに並々と冷水を注いでいる所であった。

「あ。お帰りなさい」

「喉渴いたでしょうよ、慧音さん」

「トクトクトク〜」

『 お 』

ガッシツ！

メキメキメキ

『お前は何を、し・て・ん・だ？』

「痛い痛い痛い」

「アイアンクローが、めり込む喰い込む」

顔をメキメキ鳴らされながら、注ぎきったポットをテーブルに置いて、

「じゃじゃ〜ん」

慧音の眼前に、1粒の錠剤を持つ手が迫ってきた。

『うおおおっっ』

慧音は本能的に手を離し、跳び退く！

永遠亭の輩の所持する未知の薬物が迫ってくるのに、拒絶反応せず
にいられるだろうか。

コップを背に錠剤を掲げる因幡てゐ。

一足飛び退き分の距離で対峙する上白沢 慧音の図が出来ている。

『お前』

『何処から見てた？』

「え？」

「今の恥ずかしくない箇所なんてあったの？」

か あ あ あ

慧音の顔が、見る間に赤面していく。

『・・・事に』

「え？」

『無かった事に、してやる！！』

瞬間！ てゐは、未だかつて体験した事の無い、ショッキングな世界を幻視していた。

目の前の慧音が、凄い覇気に満ちた形相で私を指差し、慧音の拳動に波打つ袖、ひるがえる髪。

そのまま、世界が凍りついた様に静止 していた？ 判らない

私の感覚が曖昧で、夢を見ている事に気付いていても、何も意識を持ち込めず、ぼおくと無感情に傍観している事しか出来ていない様な感覚。

自分の知覚させられている周囲の世界の彩りは正常で、慧音とその辺りだけ色彩と云うものが失われて視えた。

いや あれは
膜かな。

向こうの色彩を透過させない薄い薄い　そんな膜状の何かが慧
音の前に出来ていて、膜越しに灰色の様な　灰色でさえ無い様な
姿を、姿を

・・・ちがう

あれは、私だ。

あれは、
いつの間にか私だ。

膜の奥にいるのは、色彩の無い半獣じゃない。

膜の奥に映っているのが色彩の無い妖獣なんだ。

あれは、わたしだ。
わたしなんだ。

見てる。
色彩の無い私が見てる。

だ　め　だ
見られたくない
あの私に、見つめられたくない。

あれは、わたしの大事なものを持っているんだ。

わたしソノモノだ。

来るな 此方まで来てはいけない。 お前は私に触れてはいけない。

壊れてしまう。 もう こんな近くまで 目の前に来てる

あと少しで 膜が触れて 壊れて 喰われて

しまう

色の無い鏡面の膜は、音もなくひび割れる。
裂け目から膜の先の彩り豊かな世界が覗く。

多角形に大きく細分した私が いつまでも、私を見ている。

もっていかないで。

私を持っていったまま、そっちにいかないで。

戻ってきて。

そんな目で

私をみないで。

そんな、

虚ろな目で

そっちに

私は居ない

だめ

私は私を

手放しちゃだめだ

行かないで

ここに在るのに

私達の大事なモノが、私達の中に在るのに

無くしたくない

亡くしたく

もどって……

色のある

わたし……

砕けた膜に映る因幡が、その虚ろな瞳に一筋、二筋の涙を流し、

慧音の中に消えていく。

大事な因幡の時間、記憶、体験、因幡の存在していた事実。

”過去” と掛け捨ててきた、 そんな積もりになっていた、

”過去” に生きていた因幡が。

紛う事無き、因幡てゐの名を持つ者が、散り散りに屠られ無かつた事となった。

単純な記憶・認識的な喪失とは意味を違^{たが}う。 無い事は喪失しよ
うがない。

因幡てゐの歴史が、今、上白沢慧音に喰われてしまった。

・

・

・

・

「ん？ あれ？」

わけが分からない。
何してんだろ、私。

目の前に慧音がいる。
もう、思いつき見付かってるし。

『お前、こんな所で何してんだ？ 因幡てゐ』

それは、ごもつともで。

「えーとおー」

薬使う相手を探して…

「家の虐めつこ兎（鈴仙）に追い回されてて」

窓の奥にこの人の頭がみえたから…

「喉が渴いてえ…お水でも拝借しようかと…」

こっからが、もう訳分かんない

あ。本当に水ある。

「その後が、もう分からない」

『そうか、そうか』

『いや、良いんだ。あんまり気にする事はない』

遊び相手が、えらく満足気な顔でいる。

これは さては、何かされたか？

限定的な時間の
記憶喪失？

空の薬瓶

後ろのお水

最後の一粒を持つ私と、余裕顔の半獣

私の性格なら

そして、この半獣の能力って確か歴史を

はっは〜ん。
なるほど。

最後の錠を薬の容器に戻すと、2つのコップに顔を向けたまま

外から慧音の頭を見た瞬間の表情を、再び浮かべていた。

そして

くるりと反転して慧音を振り返った因幡てゐは、満面の笑顔であつた。

それはもう、物凄い満面の笑顔を慧音に向けていた。

「そっか！」

「わかりました」

ポンツと容器を持ったままの手を打ち。

カラン と一錠分の音が容器から鳴る。

「喉が渴いて弱っていた私に、慧音さんがお水を分けてくれたのですね？」

『え え ツ ！？』

「そして、慧音さんと仲良く一緒に、お水を飲む所であったと」

『いやいや』

慧音の否定的な反応もお構いなしに、薬の容器とラベルをコップの側に置き、水の入ったコップの1つを手にとってしまう。

「私にそこまで親切にしてくれるなんて 慧音さんは、なんてお優しい人なのでしょう」

そして、もう一つのコップを慧音の方に差し出すのだった。

それはもう、嬉しそうな

満面の笑顔で。

「慧音さんの優しさは、大國様ダイコクサマのよう」

『……………』

眼前に差し出された水を前に、硬直する反応しか出来ない慧音。

「……………」

「……………も」

因幡の笑顔が、瞬時に泣き出しそうな悲しい表情へと変わった。

「もしかして、違うのですかあ……………」

実際は、大した泣き顔にもなっていないのだが、笑顔との落差により、慧音に与える印象と真実味を増している。

「追い回されて 喉が渴き果てて」

「慧音さんと2人きりで、お水が2つあるのに」

慧音の前で、コップがカタカタと震えだす。

「これで、私達の飲み水じゃないなんて」

「それでは私は、何をしていたと云うのでしようかああー!!」

「慧音さんは、私を相手にせず一体何をし…」わッ 分かったよッ」

『水でも何でも一緒に飲むから勘弁してくれ!』

とうとう観念した慧音がコップを受け取ると、また瞬時に元の笑顔に戻った因幡が、元気にコップを上げて乾杯の音頭をとった。

「それじゃ、一緒にかんぱっい」

『か 乾杯 』

な なんだろう、この展開 と慧音は思う。

まあ、いい具合に喰ってやれたみたいだし。

水くらい与えてやって、妹紅が戻る前に帰ってもらおうか。

実際私も喉渴いたし。

そうして慧音も水を飲もうとして、チラリと因幡の方に目がいくと、兎はいつまでも水を飲まずに、ジッと一点を見つめていた。

その先は 因幡の持っていた薬の容器。

そして、その側には裏側が取説になっているラベル。

『どうした？』

『飲まないのか？』

その声を掛けてみたところ、いきなり自分の額をピシヤンと手の平で叩きだした。

ピシヤン！

「あいつた」

「慧音さん」

「これ多分、私、盛っちゃってますねえ」

いかにも、

やっっちゃったあ 的な無邪気な顔で言い放つ。

『もってる？』

『……』

『えッ 盛ってるー！』

「何かよく分からないのですが、私こんな物を持ってたみたいですよ」

そう言うと、元々薬の容器に括り付けられていたらしい、輪ゴム付のラベルを見せられた。

「私が薬と一緒に持ってた紙によるとですね」

ラベルには薬の名称が明記されており。

『水溶性連呼丸?』

「その薬飲むとね」

「飲んでから最初に発した一単語しか言う事が出来なくなるみたいなんですよお」

その裏側には、水溶性連呼丸レンコガンの用法・用量、そのろくでもない薬のろくでもない使用目的。

実に、事細かな取り扱い説明書となっていた。

と言うか

あの、たまに置き薬や薬種行商で里に来る兎気苦労が伺えるよ。

『その、ろくでもない薬がこの水に・・・』

「かなりの高確率で盛ってるでしょうねえ」

「私の事ですから」

『おまえさッ!』

私は遂に耐えきれなくなり、ガタン!と大きな音を立て兎に喰っ

てかかる様にして、実に根本的な質問をした。

『どうして、そんな事するの!?!』

「さあ?」

「そう至った経緯が一向に思い出せないですよねえ」

その眼は、ただジツと慧音を見ていた。

『うつ!』

しまったー!

余計なモンまで喰ってしまったー!

「まあ、理由は嫉妬だろうね(小声)」「
慧音には聴こえない。」

「まあ、そんな事より飲みましょつよ」

「かんぱい」

『何でだああ!?!』

激しいツッコミ様のあまり、元々冷水の入っていた空のポットが宙を舞う!

「おおっ」

カラカラ舞い回るポットに兎釘付け。

そして、落下するポットは、ハシツと慧音の片手に収まった。

『決して妹紅ん家の備品を破損させないッ』

「じゃあ、投げなきゃいいのに」

『そ そんな事より』

『こんな劇薬、なんでわざわざ飲むんだよ』

『捨てればいいんだ』

「ええ〜？」

「慧音さんも、やっぱり半分人間だなあ」

「燃やして溶かして変質させてフェムト程に刻んでも、人間に物質を真に無にする程度の能力なんて無いんだよ？」

やれやれとでも言いたげに、首を左右に振ってみせる。

「人間はすぐ捨てるって、目の前から見えなくさせたら消してやった気になるけどねえ」

『そんな事なんか分かってるよ』

「いや、分かって無いですねえ」

「例えば、慧音さんが外に打ち捨ててやったとしますよ？」
「地面の水気に溶け込んで地下水に染み込む頃に、果たしてお師匠さまの薬はどうかなあ？お師匠さまの薬だからなあ」

『それは』

「それより蒸発して、大気に溶け込んだら」
「お師匠さまの薬も幻想郷中の水分に溶け込んだりとかあゝ」

『うっう』

「やがて、人里中に降りそそぎます」
「ちよつと口喧嘩してた人とか、争いは止まらなくなりますが」

とても容易に想像出来てしまう慧音。

ダラダラと嫌な冷や汗が止まらなくなる。

「みんな慧音さんの所為で、里中大異変に見舞われたんだねえ？」

『それはダメええ！』

両手で頭抱えて、仰け反る慧音。

「ね？ だから、飲んでしまおうように作られた物なんだから、飲んでしまうのが、一番自然に無くせるんですよ」

「そつだ！慧音さん」

「せつかくだからゲーム感覚でいきましようよ」

『ゲーム感覚だと？』

「このまま、せーの でお水を飲んで、外れた方の話し言葉が残念な事になるのです」

『そんなの両方入ってるかもしれないだろ？』

やった。ハマったな。

と、出端でゲームの提案自体が否定されなかったこの瞬間、因幡は思惑通りに進んだ事を確信した。

「肝は正にソコなんですけどね」

因幡は、一旦テーブルにコップを置くと、ちょっと苦しげに両手で髪をわしわしと解く様な仕草を始めながら、その場を歩き回る。

「確かに、何・故・か！記憶がほんやりしてるんですけどね？」

「私の性格を考えると、薬は片方にだけ盛ってるとしか考えられないんですよ」

「私が云うのだから、そうなのです」

「ただ、」

因幡は再びコップを手に取ると、慧音に向き直り。今度は、ジ
トと疑う様な目で自分の水を見ている。

「それが、どっちなのかが」

「もう全然見当つかないんですよえ〜」

と言うか 途方に暮れた様な目で、コップ越しに慧音を見ている。

見られている慧音も、因幡とは、また違った意味で途方に暮れた
目を自分の水に向けていた。

これ 結局飲むしかないのか？

あの兎に無理に飲ませて、吹かれでもしたら、何か最早、一滴床
に落ちるだけでも危険な気がしてきたんだけど

今更ながら勢いで歴史食べちゃた事を、慧音は深く後悔していた。

もう、どんなに折檻したって、どっちが薬入りか聞き出す事など叶

わないのだ。

「ま、そんなわけですから、ちゃちゃっとイッちゃいましょーよ」

絶対！嘘だ！

この兎は、嘘をついているに決まってる。

結局私に飲ませたいだけなんだろう？

ゲームだとか言っつて、私にだけ飲ませて、当たらなかつたら、逃げ出す腹積もりなんだろう？

私はそんな目論見にも気付けない程、馬鹿じゃない！

「じゃ、いつきまゝす」

「せえゝのはいッ」

ゴックンッ

ゴックンッ

ゴクゴクッ

不意に合図が切られると、全く躊躇なく、因幡は水を飲み始めた。

え！ばっバカなッ

バカなああー！？

因幡に対してゴツプは結構大きめな為、ペースこそ遅めだが、目を瞑ったまま喉が鳴り動く度に確実に水は飲まれていたのだ。

ゴクッ…ゴクッ…

この兎、こんな純粋な性格してたっけ!?

ゴクッ…ゴクッ…

あれ?

これ、ひよつとして私が非道くない?

ゴクッ

喉枯らして、

入ってきたんだよね?

不法侵入(注 正しくは慧音も)っばいけど、水貰いたくて来たんだよね?

ゴクッ

結果、偶然私の痴態を目撃して。あの時も、もしかして、お膳立て良く水があったから、戴く所で私が気付いただけなのか?

ゴツキュン

まあこいつ、ついでみたいに盛ってたけど。

で、歴史まで喰われてしまったって事に

そして、あと少しで水が半分位には減るあたりで、因幡がパチリと目を開き、慧音と目があった。

ゴクツ　　ゴ

「……………」

ピタッと因幡が止まり、無言のまま、ゆっくりコップを置く。

じわあ〜

見る間に、慧音を見る因幡の瞳が潤み始めた。

『わかったッ！飲む！』

『飲むからああ！』

『うおお！もうどうなっただって知った事か！』

『飲んでやんよッッ』

ガツシリと慧音がコップを両手に持ち直した後は、もう一瞬！本当に一瞬であった！

グビグビグビグビッ！

ゴククッッ！ゴクン！

あつと云う間に、慧音は水を飲み干した。

『……………』

「・・・」

飲んでしまった。

2人とも、水を飲んでしまった。

後はそう

どちらか一言、何か言ってしまうえば、結果が明らかとなる。

なるのだが・・・

『・・・』

怖い　これ、

恐くて声が出せない。

心境は対面している因幡も同じらしく、声を発せないでいる。

って言うか、お前の水が半分残ってるんだが。

全部飲めよ。

もう飲んでんだから、変わないだろ？

あれ？　おい。

お前どこ行くの？

何で、そんな家具の隅へ入って行くの？

そんな所に入って、一体何をしようと

何を思ったか、互いに牽制に入っていた因幡が、何かに微妙に反応するかの様な動きを見せると、スツと動き出し、丁度身が隠れる様な所の隅に体育座りで収まってしまった。

慧音からは、丸見えであるのだが。

お前

何をやって

ギコンツッ!

扉が開くと、程良く力が抜けてリラックスし、撫で肩でしなやかな歩き方をする妹紅が帰ってきたのだった。

もっ!

『!?!?!?!?!?』

「おっ!」

「来てたのか慧音」

『!?!?!?!?!』

慧音はつい、不用意に言葉を発してしまいそうになり、咄嗟に口を押さえる。

しかし妹紅の、この湯浴み帰りの、艶やかさはどうだろう。

妹紅のギャップも相俟って、色気がまた格段に跳ね上がっているではないか。

慧音は同性ながら、クラクラする思いがした。

ああ

その、ちよつと一筋喉まで零しながら水飲む姿とかも、また艶やかで同時に格好良くも

グビツ　グビツ

ゴクン

『妹紅おおお！！！！！！』

「うわっ！」

「なに、慧音？」

気を抜いていた所を、いきなり叫ばれ、驚いてしまう妹紅。

あ　あれ？

確か飲んでから最初の単語しか出なく

”うわっ”

”なに”

”慧音”

・・・っ。

と、と云う事は、
当たったのは

「慧音？」

「顔が真っ青だぞ？」

ちよっと待てッ

私さつき、何て言ってたんだっけ？

”妹紅おおお”

『・・・』

慧音は、恐る恐る喉に手を充てる。

ゴクッ

生唾を飲み、ゆっくりと息を吸い込んだ。

『妹紅』

『もこお、妹紅お〜』

「だから、何だよ慧音」

慧音は崩れる様にガクーンと手を付き膝を付き

『妹紅おおお〜』

色々と堕ちた。

「えええええ〜！」

「何？ なにい？」

「私、なんかヤバい事でもしたのか!？」

事情が全く分からない妹紅の顔色も悪くなっていく。

「まさか この水」

「飲んじゃあイケない様な水を 私は飲んだのか？」

「うつつ、そう言えば何か 気持ちが悪くなってきた」

『もこ、妹紅お』

慧音は真つ青な表情をそのままに、首を左右に振りながら妹紅の肩に手を掛ける。

「だから、妹紅じゃ分かんないよおっ！」

ガツシ！と慧音の肩に掴みかかり、ガクガク揺さぶりながら妹紅の錯乱に拍車がかかってくる。

「私は何を飲んじまったんだよツ！ 死ななくたって、死ぬ思いし
たくないよツ」

「教えてくれよ、けーねえええ！！！」

ガツクン！ガツクン！

『妹紅ツ 妹紅妹紅ツ』

『妹 紅ツ！もこツ』

ユサユサユサツ

「だから、ソレ止めるよおおおお」

「不安になる！不安になる！！」

ガクガクガクツ！！

『も！ こお もー』

一方、そんな一部始終を目の当たりにしていた因幡は、もつそろそろ限界を迎えようとしていた。

「つつぶ ヒュッ」
「ッ! ッ!」

言葉にもならない空気の漏れ出す音が、必死に抑えようと口に強く押し付けられる手から吹き出てしまう。

もう片方の手は、お腹に充てられている。

ぴゅヒューー

だ だめ

駄目だこれ

・・・じ・・・

じっ・・・

・・・じの・・・

「くっ ひっ」

この面白さは、許容量を越えている!?

涙目で笑いを堪える因幡は、この騒乱に乗じて開け放たれたままの扉へと向かう事にした。

この遊びを次なる展開へと進展させる為に

バン バンツ
バンツ！

慧音の肩に掴み掛かっている妹紅の耳に、ガラス窓を叩く様な音が聞こえた。

バンツ！ バンツ！！

遠慮の無い、割れてしまいそうな音だ。

『妹紅 もこ』

ふと、妹紅が音の鳴り響く窓を見ると、うさ耳を左右にお辞儀させた小っさい妖怪兔が顔を覗かせていた。

「お前は 輝夜ん所のチビうさか」

『もこッ！』

妹紅の手の内で、慧音がビクンツと反応する。

「今は お前なんかに構ってる暇」

「いや」 やっぱり妹紅さんの所に居らしてたのですね。慧音さ

ん

「探したんですよ？」

「病気の身で永遠亭から逃げ出したりするから」

『妹紅！ 妹紅ーッ』

「慧音が病気だあ？」

妹紅が、ようやく慧音を解放する。

「取り合えず、私も中に入れてもらって良いですか？」

「ここ、かち割って」

「駄目に決まってるだろ！ 何言ってるんだ！」

「そのまま、引き開けて入れればいい」

「・・・」

カラカラッ

「開いた。じゃあ、遠慮なく」

因幡から見て右から左にスライドして開いた窓の縁に両足を乗せて、ぴよい〜んと妹紅と慧音の側に。

正確には、なるべく慧音には近付かない様に、妹紅を挟む位置取り

で着地した。

慧音が病気だと言われ、つい入れてしまったが、妹紅の警戒心は因幡に総動員されている。

因幡が入室位置を考慮するまでもなく、慧音を今度は因幡から庇うように自分の背中へと配し、妹紅は永遠亭の住人と向かいあった。

「妹紅さんの家って不用心ですねえ」

「不在な時くらい鍵かけないから、病人に逃げ込まれてしまうんですよ?」

『妹紅!妹紅おゝ!』

慧音が後ろで、妹紅の肩をバンバン叩いてくる。

「分かってるさ。慧音」

「心配しなくても、こんな奴の言う事なんか鵜呑みにしやしないさ」

『妹紅……』

「いや 本当に慧音さん、病気なんですよ」

「妖獣だけが患う、流行性の病気です」

「って言うか、そもそも慧音さん自ら治療の為に永遠亭に来てたんですよ?」

『妹紅ッ！！？』

『もこおおおっ！』

「　　け　　慧音？」

「　　そう言えば、さっきから何で　　」

妹紅も、やっと慧音の様子が普通じゃない事に気付いた。

「　　本当に病気なのか？」

「　　あ。妖獣にしか感染しませんから御安心　　」

「　　空気がカラカラ乾燥する、この季節に、妖獣達の間で流行るんですよ　　」

「　　私は予防接種済みなので免疫力が強いのですが、感染すると慧音さんみたいな痛い感じに　　」

『妹紅おおおヴッ！！！！』

ここで慧音が猛然と襲い掛かってきた！！

「　　うわあああっ！！！！」

あとちよつとで因幡に届く寸前で、ピタッと急停止する慧音の恐拳。

「ちよつ　ちよつと待て！　慧音、落ち着け」

『もこおおヴッ！』

『妹紅おおーヴー！』

慧音の背後から、妹紅が抱える様に取り押さえていた。

「慧音！　慧音え！」

「おいっ、兎！」

「病気って、こんなに狂暴化するものなのか？」

流石の因幡も、本気の殺意をヒシヒシ受けて、少しだけ

こ　これ以上、半獣をおちよくと本当に食べられるかも知れないかな？

と、怖じ気づいてしまう。　が、中途半端に投げて逃げ出した所で、待っているのは断末魔の阿鼻叫喚も子守歌に思える程度の、非情非弾幕な兎狩り？

「いやいや、暴れてらっしやるのは病気とは関係ないですね」

「恐らく慧音さんは、永遠亭の診療室で展開させた大立ち回りを、妹紅さんに聞かれたくなかったんですよ」

『妹紅？』

『もこっつ、妹紅お!』

意味の分からない事を言われた慧音の動きが、停止する。

何を言い出すつもりだ?と言うのが慧音の今の心境だが、嫌な予感しかない。

全く先の見えない因幡の言動に、今度は慧音が戦慄を憶え始めていた。

「もう、妹紅さんもお察しの事とは思いますが、妖獣がこの病気に感染すると」

「妹紅」としか、言えなくなります」

「なんだ、それ」

「そんな流行病、在るわけないだろ?」

「それが、モコフ(いや…自…重…しようか?)」

うん。やっぱり自重する方が 良いのかな?

因幡が短い瞬間の棒立ち状態で、一生懸命考えている。

よし!決めた!

自・重・し・よ・う!

(てみちゃん、決断までの経過時間、2須臾)

「もこふるえんざ」

「もこふ　なにっ？その親近感のある病気」

「妹紅さん、知らなかったのですか？」

「竹林の妖怪兎に、妖怪の山の犬ころ天狗も、式の式の化け猫も

」

「あっちでモコモコ」

「こっちで、もこもこ」

「うおおおおッ」

「まじかあぁー！」

『妹紅おお！』

『妹紅妹紅お！？』

ぶん！ぶん！首を左右に振りながら、必死に否定主張する慧音！

しかし、慧音の言動全てが妹紅に対して全肯定になっていた。

「止めて！慧音！」

「恥ずかしいから、ちょっと黙っててくれ」

『妹紅つつ！！！』

「頼むよおお」

妹紅の顔が、本当に恥ずかしさで赤面していた。

『もお！ こそ』

「で、殆どの妖獣が予防接種を済ませてしまつのですがねえ」

「慧音さんは やっぱり半分だけ妖獣な為か、今まで感染せず、予防も怠っていたみたいで」

「でも、治療にお前らの所に行った慧音が、何で逃げ出してくるんだよ？」

「何か非道な事を仕掛けてきたんじゃないのか」

妹紅が一步踏み出し、因幡を見下ろしに凄んでみせる。

「当永遠亭は、八意印の真つ当で適切な上に、たちまち完治する抗生物質を処方しましたよお！」

因幡は全く怯む素振りも見せず、腰に両手を充てて抗議する。

『もお…（微弱音量）』

人知れず、慧音は溜め息すら妹紅になる事を知る。

「ただね」

「その抗生物質の粉薬が白湯と混ざる時の苦い事、苦い事」

「苦い　　だけか？」

「短時間で即効性も効能も薄れるので、処方して即飲んでもらう薬なんですけどね」

「心身共に大人な妖獣が、ギリギリ大丈夫な程度な苦味です」

「内面が幼い妖獣なんかは、それが嫌で予防接種を怠らない所がありますね」

家の兎とかね？と、付け足すのを、因幡は決して忘れない。

「妖獣の間では周知の苦味で、慧音さんには事前に説明もしたし」

「まして慧音さんに限って苦い事なんて問題にならないと思っただのに、慧音さんは」

「慧音さんはああ！」

因幡は声の限りに張り叫ぶ！！

全くの空想のお話を、涙声で唱い挙げる！！

「慧音は・・・」

「慧音は、何をしたって云うんだああ」

『…………』

「粉薬を口に入れて白湯を含んだ瞬間！」

「ザ・グレート・ムタの毒霧の如き薬霧を眼前の鈴仙に吹き射して、両目を潰しッッ」

『もこッッ！！？』

因幡は、ググツと全身に力を込めて、慧音の見せ場に臨場感を煽る！

「指差して爆笑しだした姫さまには、猛然と跳びかかると、シャインング・ヤクザキックをド顔面に打ち込んでッッ」

「うおおおおお！！」

妹紅のボルテージがグンツと上がる！

「お師匠さまが、大慌てで姫様の元に

姫っ　輝夜ああ！！

タタタタッ

永琳が輝夜の元に駆け寄り、キツと慧音に向き直ると、慧音は体を永琳に向けたままの体勢で薬棚に飛び付いている所であった。

な ななっ 何を！

『不死！火の鳥、鳳翼天翔おおお！』

ダンッッ

そう叫ぶと、

まさかまさかの空中殺法、ファイアーバード・スプラッシュを炸裂させるのでしたッッ！」

「ハヤブサかッッ」

「隼って、鳥の？」

「そして、素早く展開される姫さまと、お師匠さまのリザレクシヨ
ン。

それを

それを

『させるかああ！』

それ程までに何が憎かったのか、まるでハクタク時の様な覇気をお師匠さま達へ放出すると、今度は二人に背を向ける形で薬棚に飛

び付きッ！

ダンッッ

空中で半ひねりを加えながら宙返りをッッ

『フェニックスッ』

まって…まだ途…

『再誕ッッ！！』

ゴッッ

シャアアあッ！！！！

診療室中をファンタズムな彩りに染め上げた、慧音さんのフェニックス・スプラッシュ」

「私は、木製の大きな振り子時計の中でガタガタ震えながら、息を殺している事しか出来ませんでした」

「け け 慧音」

『もっこおッ！』

『妹紅 妹紅 妹紅お』

「が、し・か・し！」

「一度診た患者さんを決して見放さないのが、八意永琳！」

「逃げ出した慧音さんの為に、飲み易くて薬効寿命を強化した丸薬化の生成を見事成功させたのです」

「ババーンツ！と、取り出したる一錠の丸薬」

『妹紅おおおお！！！！』

「うおお　慧音の為にそこまで」

「この度は、家の慧音が輝夜以外に大変申し訳ない事をしました」

「でも、私の様な小っこい素兎では、狂半獣に一溜まりもありません」

「でも、このままでは慧音さんの病症は悪化していくばかり　それに薬の有効時間も有限で」

「　わかった」

妹紅が因幡から連呼丸を受け取ると、妙に高揚した様な表情で、慧音に向き直るのだった。

「慧音　苦い薬が飲めなくて暴れ散らすなんて、悪い子だよ」

待て

待ってくれ妹紅。

それは　その薬物は

慧音が後退りするのを見て、因幡の虚実に納得した様に、妹紅の使命感に扇情的な火が熾こる！

「慧音え」

「妹紅お姉ちゃんが、ちゃんと飲める様に手伝ってやるからなああ」

『妹おっ紅おお！？』

待て待て待って！

それっ　それじゃんッ！

だってソレが、これのそれじゃんッ！！

えっ　えっ？

それ、またいつたら最初も何も、いま妹紅しか言えないんだけど？

どうなるの？

妹紅の上塗りになるの？

「慧音さん。大人しく妹紅さんに飲ませてもらわないと、どんどん悪化しますよあ？」

「診療時は、たまに妹紅出る程度だったのが、今では、そんな事になってるではないですかあ？」

「なにいい!？」

「それは大変だよ」

「これ以上、あっちこっちで妹紅妹紅云われちゃ堪らないよッ!」

妹紅が丸薬片手に飛びかかる!

『妹紅おおー!?!』

「我が儘言うんじゃありません!」

「こらッ 慧 くッ お姉ちゃんの言う事を聞きなさい!?!」

『もこお 妹こっ! もごおッ も 紅おッ』

「はい! ほら、飲み込め! 早く飲み込んでしまいなさい」

「飲み込まないと、苦いのが終わりませんよ?」

『ッ! ッッ!?!』

「ほら! ほらあ!」

「けーね飲みなさい」

「お姉ちゃん、ちゅくしますよっ!」

ゴクンッ!

『妹紅おおおお！！』

「ちゃんと飲めたじゃないか。良かったなあ」

「これ、慧音はどのくらいで元に戻るんだ？」

「……」

因幡は未だかつて、笑いを堪えるのに、これ程苦しんだ覚えは無いと云う思いをしていた。

「の 飲めば、たちまち完治しますよ」

慧音は、すっかり意気消沈している。

『妹おゝ紅おお』

「全然治って無いみたいなんだが？」

「これは 慧音さんの病症が薬効を凌駕しているみたいですね」

「逃げたり暴れたりしてるからあ」

「ええっ、それじゃ慧音はどうなるんだよ！？」

「それは、まあ。このままでいいよ」

「自然にどうにかなるまでは、寺小屋でもこもこ、こ近所でもこも

「」

『妹紅ッ!?!』

「それはダメええ!」

両手で頭抱えて、仰け反る妹紅。

「そつだ! 気は進まないが、今一度、永琳に診て貰おう!」

『妹紅、妹紅妹紅お?』

「何言つてんだか、サツパリだが」

「慧音の為だ!」

「お姉ちゃん何処へだつて慧音連れてくぞツ!」

「助けて、え〜りん!」

「では早速、永遠亭に出掛けましょう」

「道中の安全はあ」

因幡が両手を広げて、クルクル回って舞いはしゃぐ。

「お宇佐さまの御墨付きですよ〜」

『もっこッッ!』

因幡の顔を思いつ切り抓ってやりたい衝動に駆られた慧音が、顔のギリギリで因幡に受け止められ、互いに譲れぬ拮抗状態に。

「け 慧音さん」

『もおっ ごおお』

「どのみち」

「お師匠さまには 診てもらわないっ と、どうにもならない事には か 変わらないんですよおお？」

『もこッ！』

『・・・』

ようやく、慧音は因幡への攻撃を解いた。

因幡は、妹紅には聴こえない様に慧音に囁きかける。

「そ それに、お互いにフェアな立場だったのですから」

「私が飲んでいたかも知れないのですから」

もし、そんな事になっていたら

「私と妹紅さん揃って当たってたなら、私は今頃、慧音さん妹紅さんに素焼き兎に」

「慧音さんだつて、妹紅さんが誤飲しなくて、良かったでしょ？」

「つまり、実は一番マシな結果に至る程度の幸運だったのですよ」

『もごおお』

慧音は、完全に納得させられてしまった。

確かに間違いなくフェアで自ら飲み干し、妹紅にまで飲まれてしまった以上、この結果が　　と言っか。

良く考えたら

妹紅んちに2人して勝手に上がり込みロシアンルーレットみたいな事やって、妹紅に、”うわ”しか言えない様な事にさせたら　　竹林で兎と並んで正座させられ、

「うわ！ヴわあッッ」

「ヴヴヴああア！！！！」

ペカーー！！？

”滅罪「正直者の死」”

とが展開されて、散っていたに違いないッ

ふおおおおっつ

あヴなああーいッ！

「ほら、さっさと奴らん所行くぞ。 慧音」

グイツと妹紅に腕を引っ張られて永遠亭へと出発する慧音と、そして因幡てゐ。

因幡がまさか、こんなシチュエーションの時には、自分から見て基本左に盛り付ける と言う自分ルールを課していたとは、夢にも思わず。

・
・
・
・

永遠亭

「分かりました」

師匠が、自分の中で総て合点がいったと言つ様な、自信に満ちた表情で頷きました。

「慧音さんが仰りたい事とは詰まり、こつ言つ事ですね？」

慧音さんの顛末を憐れむ様に、師匠の手が慧音さんの手に差し伸ばされて、熱烈に語る慧音さんを引き留めます。

そして、優しく微笑み。

「妹紅ふおーりんラブと」

『妹紅おおーうっ』

両手に添えられた師匠の手を、慧音さんが払い上げました！

「あら、違つたのねえ」

「ご自分の頬に手を充てて首を傾げて、困り顔をする師匠。

師匠、間違い無く確信犯的ですね？」

「なあ、そう言わず慧音を治してやってくれよ」

「慧音が、永琳や赤眼兎に放つた仕打ちは、私が代わって謝罪する」

「えっ？ 何が？」

つい、素っ頓狂な声を出してしまいましたっ

師匠と顔を見合わせますと、師匠も意味が分からない　と首を
僅かに左右に振ります。

「目はちゃんと見える様に戻ったんだな」

「ええっ！私？」

「目は　え　ええ、お陰様で」

何で知ってるの？

藤原妹紅は千里眼？

てゐ　が、何か吹き込んだのかしら？

チラリと慧音さんの方を見る　と、

な　なに？

何か凄く震えている。

俯き気味で、表情が読み取れないけど、何かが振り切れる寸前みた
いな波動を感じますよ？

「こんなになっても、まだ治せるんだよな？」

「慧音の・・・」

「もこふるえんぞ」

藤原妹紅が、永遠亭の時間を停止させました。

てゐるは瞬時に、壁を向きます。

「師匠は、完全停止。」

表情も拳動も微動だにしません。

ああ、師匠。

なんて冷えた目を。

や　やはり、私が。

「妹紅さん」

「えと、モコ　もこふ？」

「だからサ」

「もこふるえんざ」

「バカじゃないの？」

「チルノちゃん!!!!!?」

マイナスK　に凍りついた氷結亭は、氷の妖精がまさかの氷解けをさせました。

「えっ?だって　もこ　ふるえんざ」

妹紅さん、だんだん赤面していきますね。

その瞬間です！

『モゴオオおヴヴヴッ』

慧音さんが魔獣の如き唸りを上げて、てゐの頭部に十指の牙を突き立てました！！

ギリッ ギギッ

「ぎゃわわはッ」

「痛い痛いっ」

ギギ ギギッ ギリ

ミシ ギ

「いいーだだだッ」

「痛い 痛い いだ」

・・・ギ

「あ!!!?!?」

「ぎゃあああッッ」

てゐの声色が急に致死性を孕む絶叫に!!

「ちよっ てゐ!!」

「慧音さん、もう離してあげ ヲッ!!」

な、なんて

「助けて！ 誰か助け 痛いッお願い止め 壊れるヨオオおッッ」

「慧音さん！」

「ちょっと、落ち着きなさいっ！」

「それ以上は本当に」

し 師匠が、ちょっと本気で止めに

「うごんげ！」

「手伝いなさいッ」

「け 慧音？」

ミシ ミシ

メリッ メシッ

「流石に死なせそうなまで本気 ヴッ！」

「慧音、お前ッ」

「お前、なんて 何て顔してんだああ」

妹紅さんも驚愕させる本気も本気、真にぶつつんした狂獣殺意の形相が、今ここにいいいいッ！！

「ご免なさあああい」

「全部話す！ 全部話しますから、許してえええええ
殺さあ
グッ」

てゐが魂からの詫びを入れた所で、やっと慧音さんが解放してくれました。

『 m o 』 オオー 』

『 m o 』 おおー 』

慧音さんが恐すぎる。

それから、てゐは全てを打ち明けました。

妹紅さんの家に入る寸前までの事と、パツと意識が瞬間転移する様に慧音さんと向かい合う場面で気付いてからの、思惑含む一部始終を打ち明けました。

「そ そんな」

「慧音は、病気じゃなかったのか」

「そうとも知らず、あんな無理矢理に」

一番、ショックを受けていたのは妹紅さん。

てゐや私達に怒り出すのかと思ったんだけど。

『 妹紅』

「ごめん、慧音」

「気付いてあげるのが遅すぎたな」

「ごめんな」

『もう、妹紅』

慧音さんも、すがり付く様にして、妹紅さんに頭を下げます。

「慧音は何も悪くない」

「私が、もっと信じるべきだった」

「輝夜にシャイニング・ヤクザキック辺りから私もどうかしていたな」

妹紅さん慧音さん。

そんな事ありません。

悪いのは、全部てゐに決まっていますよ！

「てゐ。もう一度謝っ 何処行っただ？」

「あたい、見たよ？」

「さっき出てった」

「入ってきた扉から、外に出てました」

隅いっこの角で、妖精2人が見てました。

「てめい」

「懲りてないのかあ」

「まあ、この際でめの事は放っておいて、慧音さんを治しましょう」
「連呼丸を飲んだ事さえ分かれば、何とかなるわ」

『もこ妹紅？』

「治せるのか？」

「連呼丸の効能だったら、この場で打ち消せる薬を調合出来るから待っててね？」

そう仰ると、師匠は薬棚から永遠亭では見慣れた数種の小粒な薬を選び出し、慎重に且つ手早い手付きで計量したら、スリ鉢に入れてゴリゴリ　ゴリゴリ

あっという間にアッサリと打ち消し薬を製薬してしまいました。

「後はこれで仕上げね」

『もこもこお　もこっ！も　こ妹紅おお！』

『妹紅お、妹紅妹紅も　こおお、妹おお・・・』

「慧音？ど どうした」

いきなり慧音さんの様子に変調が！！

「お師匠様！慧音さんの様子が急に」

師匠は慌てません。

「その様子だと、考えてる事まで、妹紅になり出したみたいねえ？」

『妹紅お〜妹紅妹お紅おおお！？』

「もう、この液垂らして仕上げに搦れば完成だから、もう少しの辛抱よ」

「慧音、無心だ！」

「深呼吸して無心になれば止まるかも」

『妹お〜〜 紅おお〜〜』

深呼吸も、妹紅になるんだ ーごめんなさい。
ちよつと面白いです。

師匠の方は、見覚えのある液体薬を

「お師匠様！ 何するんですか！」

「その液体はああ……！」

「この洗浄液は、うどんげに使った様にするには、このままでも使用出来るけど、元々、調合用みたいな所があるのよ」

師匠は、まるでニトログリセリンでも扱うかのような慎重な手付きで計量スポイトに吸引し、たった1滴垂らしたすと、親の仇でもあるかの様に擻って！擻って！粉薬を完成させました。

薬を計量すると、適量分を正方形の薬用包み紙の上に乗せます。

大きさ2杯位でしょうか？ やや多目です。

「完成したわ」

「うどんげ。早速飲ませてあげなさい」

「はい。お師匠様」

湯呑みに白湯を入れ、師匠から粉薬を受け取りました。

「ささ、慧音さん」

「お待たせしました」

「この薬を飲んだら、連呼丸の効果が打ち消されますよ」

『妹紅、妹紅おお』

直ぐに慧音さんが包み紙を受け取り、口の中に粉薬を入れました。一粒程も残さんとはかりに、仰け反り上向きに開けた口の上で、紙をガサガサ揺さぶっています。

よっぼど、元に戻りたいのでしょうか。

妹紅さんも、期待に輝く目で慧音さんを見つめています。

そして、粉薬を口に含んで顔を下げると、湯呑みを取って白湯をグイッと一気に飲みました。

「あ。言い忘れたけど、それ、一切の優しさ抜けてますから」

・・・ゴックン。

『!!!!!!!!!!?』

(薬霧) ツツブふオオオオオオー!?!?

「慧音ええええーッ」

『苦あああーい』

ポタ　ポタ

「……」

私ですよ。

ええ、私ですよ。

大丈夫。私慣れてる。

「慧音！」

「いま、” 苦い ” って」

『あ……話せるぞ』

『本当に戻ってる!』

「ヨカッタデスネ ケーネサン」

『あ、申し訳ない』

『こんな事をするつもりは』

「いや、まあ」

「元々の責任が永遠亭側にあつたのです」

「慧音さんに、無事に回復してもらえたなら、私の事は気にしないで」

ハンカチで顔を拭いながら、慧音さんの謝罪に応じます。

「ん、あれ？」

「何か眼が」

さつきから心なしか妙に暖かった眼が、急に熱く
なってきた？

「どづしたの、うどんげ？」

「お師匠様。何か眼が」

「両眼が熱いんです」

「あ？ 熱い。本当に熱いッ」

「う うどんげ」

「それは 何を」

私の眼の先から数十センチ程離れた先で、薄紅い光が収束して、
段々紅さが濃く 熱く

「わわ 私にも分かりません これは 光の波が集まって？
波長の長い赤色が 熱い！制御出来ないの！」

「じゃああたいが、冷やしてあげるよ」

キ イ イイイ

「ちよっ 余計な事は止

ピキーーーーンッ

顔面だけフルフェイスヘルメットの如く耳だけ突き抜け凍りつく
優曇華院!!

得意顔のチルノと、鈴仙以外の全員が絶句している最中、氷の中
で収束と発熱を続ける狂気の波長が、瞬く間に氷を蒸発させていく。

「あたいの氷がッ」

「い っ」

じゅううううウウウ

「いい加減にしろおおーーーー!!」

文字通りの眼前で、収束率の極限值を突き抜ける狂気の波長、所
謂レーザーが解けかけた氷塊とチルノを貫通する!

ビムーーーーーーーーッ!!!!!!

「ギョワぱぱッ」

「チルノちゃ」

「ひ 非想天則に出たばかり に ガクッ

「チルノちゃああん」

鈴仙・優曇華院・イナバはスペルカードを獲得した。

イリユージョナリイブラスト new

「はわわわっ！」

「何これっ 何コレえ」

「止まらないの。止められないの。お師匠さまあああ」

ズビビビビビィィィ

鈴仙の視線の行く先全てが狂気の閃光に薙払われていく。

パニックを引き起こした全狂乱の鈴仙と、弾幕避けには狭すぎる永遠亭診療室にて、イージーがノーマルに。

大妖精、チルノ撃沈。

ノーマルがハードに、ルナティックに。

慧音、轟沈。

やがて、東方的なゲームバランスですら狂気に狂ったイナバの狂気に爆ぜ割れる！

物音一つ聞こえず、人の気配の感じられない永遠亭診療室。

腕の中で眠る因幡てゐを、又イグルミでも抱いて持つ様にぶらぶらさせながら、診療室の扉に立つ長く艶やかな黒髪の女性。

「えくりん居る？」

カラカラカラ

「なんか、因幡が半べそでウロウロしてたから、診て欲しいんだけど

」

「ななっ」

「なにごとッ!!」

辺り一面、閃光系のスペルでも狂い咲いた様なめちゃくちゃなぶつ壊れと、焦げて崩れる永琳の私室。

燻り黒ずみ硝煙、黒煙を上げているのは、棚と薬と

死 屍 累 々。

特に、見ようによっては永琳に見えなくもない何かと、同じく藤原妹紅に見えなくもない何かは、弾幕に被弾したとは到底思えない悲惨な臭いと色を出していた。

そして、

そんな墨色に積まれた家財や屍の中で、今にも倒れそうに右に左に揺れ立っている、うさ耳1羽。

「ああ　そ　」

「その声は　姫様ですか？　今　危ないので」

両手で、自分の両目を塞いでいるイナバが、決して真正面には向かない半横向きに振り返る。

「こ　これってイナバがやったの？」

「妹紅まで　妹紅よね？あの半炭化肉」

精根尽き果て憔悴しきったイナバが、掠れた声を上げながら後ずさる。

「姫様　手が　手が熱いんです　右手が特に　焼ける様に　」

「もう　だから、お逃げ下さ　」

そんなイナバの背後で、めちゃ　めちゃ　と音を立てながら、ゆらありと立ち上がる2体の蓬莱人。

そして素早く展開される、妹紅と永琳のリザレクション。

ゆ　う　う　ら　あ　あ

「燃おえぢぬ覚悟はあ出来てんだろおなあああ」

「ヴウどんげええ？」

「今日は大変だったわねええ　なでなでしてあげるからあ　いら
つしやあああい」

「あ　ごめんなさい　手がもう　灼けるんです　中で溜ま
つて　だから、ごめんなさい　ししよ　」

ジュツツ！！

「あづツツ！」

イナバの右手だけが跳ね上がる。

解放された狂気の右眼に、溜まりに溜まりイナバの右手を灼き弾
いた直接攻撃能力を持つ狂気の視線波が、イナバ自身も閃き射し、
制御不能に咲き放たれる！！！！！！

鈴仙・優曇華院・イナバはスペルカードを獲得した。

アンダーセンスブレイク new

「待って…まだ途…」

カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ
カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ カッ

けーねのセリフは、皆様の心の中にあります。

ああ、何たる文量の長さでしょう。

何たる次話投稿までの永さでしょう。

思えば、ただ単に妹紅妹紅言わせて慧音で…慧音と遊ぼうと思っ
て始めたのは何時ぞや？

梅雨のお話をギリ時事的に御神徳にしてから、夏をスッポリ飛ばし
て秋頃に上げてから、今や真冬ですねえ。

反省してます。

景品でこんな、携帯で20ページに達するものを気軽にちよいネタ
とはとても

今回、読み飽きられなかったか心配です。

次からは、もっと気楽に読める文量でいくよ？
そうして、もっとペースの良い更新を

(DEEP三昧)

9 卷・聖夜に捧ぐ幺樂と御仏信仰（前書き）

26日だとか

かゝんけゝい無あああ
いッ
――

9巻：聖夜に捧ぐ么樂と御仏信仰

「マエリベリー・クリスマス」

聖夜の待ち合わせ。

喫茶店の温室オープン・カフェテラスのテーブルに、光学クラッカーからホログラフィック・プリズムと人工の破裂音が撃ち出される。

光の乱反射による短時間の擬似花火が、浮かれ顔の蓮子と無反応な私の顔を照らし出す。

「絶対言つと思つたわ」

「あれ？読まれてた？」

「メリーには心に見える眼でもあるのかしら」

役目を終えたクラッカーの筒口から、優しい音量のオルゴール音が流れ始めて、

蓮子は昔のマイクロフォンスタンドみたいな、付属の小さいスタンドにクラッカーを入れると、テーブルの隅に卓上BGMを据え置いて、私と向かいの椅子に座る。

「なんだか、小っさい大砲みたい・・・」

「そのオヤジ臭いギャグと、バラエティーグッズの為に、私は待たされていたのかしら？」

「ちょっと、21分25秒遅れただけじゃない」

「クラッカー見つけたのが原因ではあるけど」

「その光学クラッカー、私はあまり好きじゃないのよね」

「紙製クラッカーは無かったの？」

「紙？」

「紙製って昔の奴？」

「紙の帯と紙の雪を飛ばし散らすってレトロなクラッカーね」

店員さんに、蓮子の分の珈琲を注文して、「私は紙の奴が好きだな」ってカウンターに戻っていくサンタ服っぽい制服姿を眺めながら呟く。

「そんなクラッカー、こんな所で使えるわけがないじゃない」

「それに、どこで使っても散らかるし」

「後で片付ける事を考えただけで、テンションが下がるわ」

「まあ、この音楽が鳴る機能は私も好きなんだけどね……あれ？」
「この曲って、もしかして物凄く昔の曲？」

「うふふ 気付いた？」

「うふふ って……」

運ばれた珈琲を、そのまま飲みながら、蓮子は嬉しそうに話す。

「古い紙クラッカーは無いけど、代わりにメリー受けしそうな曲を見つけてインストールしてみたの」

「FM音源って言うんだっけ？音色こそ、オルゴール調に変換されてるけど」

「それはもう、すごい昔のパソコンで流されていた音楽らしいのね」
「？」

「PC 9 8？」

「……おんがく 幺樂」

「え？」

「うづん。何でもない」

蓮子の光学クラッカーを聴いている内に、夢で湖に訪れた時に聴かせてもらったアナログのディスク音楽を思い出した。

赤い洋館のメイドさんに連れられて、主様に挨拶に行った時だ。

今日まで忘れていたけど、クッキーをもらっただけではなく、メイドさんが持ってきた針を落とすタイプのオーディオで聞かせてもらった音楽と、全く同じメロディーだった。

赤い館で、私を歓迎してくれた翼のある幼い主様は、阿求あきゅうと言う人からメイドさんが貰って来た、その音楽の事を『么樂』と呼んでいたのだ。

曲名は確か・・・

「不思議の国のアリス」

「あれ、曲名まで知ってるくらい好きだった？」

「世界的に有名なあの物語と同じ名前だったから選んだんだけど、大当たりだったみたいね」

やがて、内部動力も事切れて赤い館で聴いた么樂が止まると。

私を呼び出した当人が、話を切り出す。

「さて、メリー」

「存分に暖まったから、サークル活動よ」

「こんな聖夜に？」

「聖夜だからこそよ」

「この間ね。今まで何回も通った事のあるはずだったのに、まるで湧いて出てきた様に、お寺がある事に気付いたのよ」

「お寺？」

「そう、お寺」

「神社じゃなくてお寺」

「不思議なのよ」

「なんで今まで知らなかったんだろ？」

「もしかしたら、結界が関係しているのかも」

「今まで見えないでいたお寺が、今なら見える様になったって事は、今まで入れなかった結界に、今なら入れる様になっているかも知れないわ」

「聖夜に、お寺探訪？」

「メリー」

蓮子は席から立ち上がると、やや斜め下を見ながら答える。

「聖夜だからこそ、私達はお寺を探訪するの」

「……」

「……」

「……はっ！」

「そうね！蓮子」

「今夜私達は、お寺を探訪しているのね！」

「そうよ、メリー」

「お賽銭入れて、しっかり拜んで、今宵は信仰心の全霊を以て仏様に帰依するのが、きっと結界を見付ける鍵よ」

そうと決まれば早速と、お会計を済ませて、2人の女性は、聖夜のお寺へと出掛けて行く。

きつと夜が明けるまで、2人の信仰心が御仏に向けられ続けるだろう。

だからクリスマスだとかは、今の2人に全く関係の無い話なのだ。

しかし、それでも。

お祝い事として、ぴったり身体に定着している聖夜の言葉は、どんなに誤魔化しても自分に向けられた喜びまで否定出来ない。

だから、この背中に声を掛け。

私はどうしても、この内に溢れる嬉しかった感情をプレゼントしなくなったのだ。

もしかしたら、こんな事を始めた最初の人も 人の数だけ、物や形式の変わってしまう様な事よりも、決まって添えて伝えられる気持ちの方が、メインだったのかも知れない。

「・・・蓮子」

「ん？」

私は、その背中に抱き付きかかって。

「わっ。メリー」

「メリークリスマス」

「わあ、メリーのダジャレだあ」

「ダジャレじゃない」

「冗談よお」

「ありがとう。メリー」

「さあ、急ぎましょう」

「来年は寅が干支だから、寅っぽい何かでも見られれば縁起物ね」

「メリーが結界の先で追われた鼠っぽいのも見られるかしら？」

「・・・蓮子」

「大鼠も寅も、居たらシャレにもならないわ」

「そお？ 案外可愛いかも知れないわ？」

斯くして、2人はお寺を見付ける。

確かに、見付けられずにいたのが、不思議なくらいに堂々とした佇まいのお寺であった。

今宵2人は、このお寺から結界のスキマを見付けられるだろうか。

それは、誰にも分からない。

2人は、まず宣言通り、信仰を形式的に捧げてみる所から始める。

命蓮寺

そんな名前の彫られた賽銭箱に、これから2人分の信仰心が音を立ち鳴らすのであった。

9 卷・聖夜に捧ぐ幺樂と御仏信仰（後書き）

こう言うのが好いです

もう一度

言いましょう

「こんな文字数で、季節的・時期的なのが良いのです！」

かと思えば、ある時は全然関係なかったり。

これが、景品なんだ。

それから、皆も

勇気を出して言い切ってしまうおつよ？

「あたい達、今日一日中、寅丸星に信仰心持ってかせてるから、クリスマスとか関係無い！！！！！」

10巻：萃まる鬼、白黒、そして節分夜行（前書き）

記念すべき、

巻物語の二桁巻話

節分の話です。

当日だけが

時事じゃない！

終わったからこそ、気を抜き切って、ご観覧下さい。

10巻：萃まる鬼、白黒、そして節分夜行

「霊夢〜」

「霊ええ〜 夢〜」

春先に向かつてか、僅かばかり朝毎の冷え込みに治まりを感じてくる幻想郷の博麗神社。

2月の3日。今日の幻想郷は節分の日。

天を飾る紅い雲の彩りが、酉の刻とずつつ　と待ちに待っていた行事の頃合いである事を、博麗神社の境内を駆け回りながら、枯渴知らずな酒気を放散させている小さな鬼に告げていた。

215

「霊夢うーっ！！」

「れえーい夢う〜」

スッ…　ダーンッ

「萃香　五月蠅ああい　　って、この流れは一度やってるじゃない！」

麓の神社の襖の先の巫女さんが、素敵なお賽銭箱と境内を一望できるお気に入り縁側から「霊夢！！　豆まき！」

「豆まきしよーよー」

はあはあと息を荒げながら、炒り豆山積みな升を両手で添え持「
楽しいよっ？」「豆まきっ」

「豆まき面白いよっ？」

「萃香」

「まずは、一旦落ち着きなさいよ」

「あんた、さっきから描写に被ってるのよ」

何をしに来たのか極めて明白な縁側向ここの升持ち小鬼の興奮を、
呆れ顔でなだめる霊夢。

216

「描写とか、そんなのどうでもいいじゃん」

「『豆まき。サクツと』が今回のテーマだって、けーねが言った」

「割と大事よ？」

「私達の台詞の前に名前とか出ないんだから、描写ありきって、け
ーねも言ってるわ」

「あんた節分だからって自由過ぎるのよー！」

「分かったから、そんなに怒らないでよ霊夢」

ふてくされた様なふくれっ面で、ぷくっ と頬を膨らませて縁側

に腰を掛ける升持ち小鬼。

伊吹萃香いぶきすいかが上目遣いで、後ろの巫女さん、博麗霊夢を見上げている。

「折角こうして、鬼が遊びに来たんだから豆まきしよーよー？」

「もう。しょうがないなあ」

「時間的にちよっと早いんだけど、どうせ半刻もしない内に陽も落ちるんだろっし」

「まあ、いま始めてもいいかな？」

「やったー」

「霊夢と豆まきだあ」

縁側ではしゃぐ萃香を尻目に、節分の準備の為に居間へと戻る霊夢。

「ああっ」

「しまったー！！」

霊夢が部屋に戻ったと思ったら、素っ頓狂な霊夢の叫び声が聞こえてきた。

靴を脱いだ萃香が慌てて声のした方向。

縁側のある居間に隣接した台所へと向かった。

「どつたの？」

「霊夢？」

「柀の枝はあるけど、 鱒が無い」

幻想郷。

常識で構成された外の世界から、外の世界にとっての非常識と言
う幻想の境界で隔絶する『博麗大結界』にて千年以上もの間、妖怪
に襲われる人間。人間を襲う妖怪。妖怪を退治する人間。といった
三竦み的なバランスで まあまあ大ざっぱな感じでは成り立って
いる世界。

そんな、外の世界で力を失いつつあった妖怪達にとって、まさに
理想的な桃源郷の様な幻想郷には 海が無い。

よって、

わたくし、さつと人里に行って買ってきますわ？

と、いった具合には行かないのである。

「紫に頼んどくの忘れてたああ あ あッ！」

「なぐんだ、戸口に挟んどく鱒の柀ツエペシユの事かあ」

「ツエペシユ？」

「吸血鬼が未裔だとか、のたまってる外界のとある地域の本名不詳な英雄で、『ツエペシユ』は串刺し公的な意」

「嫌な事言うわね」

「確かに、鰯の頭の串刺しだけど」

「ああ ああ もう、どうしよう。一気にやる気が失せたわ」

「大丈夫だよー」

「私が持ってきてるんだからねー」

そう言うつと、萃香は両手持ちの升を左手に持ち、右手だけで衣服やら頭の辺りやらをゴソゴソ探りだした。

「あなた、本当に用意が良いのね」

「私、鬼だからね」

「云ったら節分のプロミみたいなモンだよ？」

「ん おろ？あれね」

「ちよつと」

「まさか、あんたまで忘れてきたなんて事…」

「あ。そっか」

萃香は、ほんっの一瞬だけ台所一杯の霧となって霧散すると、また一瞬で元に戻り、右手に鰯の頭を串刺した柎の枝を持っていた。

「ここだった」

「何処に隠してたの！」

「それは、萃香ちゃんの七不思議さ」

「はいっ。これ戸口に挟んでおくからねえ」

「何か、鬼に貰う鬼（厄）払いつても 萃香ちゃん！ちよつと待った」

再び霧散しかけた瞬間を霊夢に呼び止められ、今度は裏口用なども含めた、数本の柎を持って居間に出現する。

鰯が数匹になった事で、今度はハッキリと鰯頭の異常が感じとれた。

「鰯、酒くつつさッ」

「えっ？そっかなあ？」

「いつもの萃香ちゃんの匂いしかないけど」

「それが、酒臭いって事じゃないの！」

バシツと一本、柎の枝を引ったくり、匂いを再確認する霊夢。

「って言うか、あんたよりも酒臭いんだけど」

「萃香ちゃんより、萃香ちゃんの匂いがするんだけど、この鰯！」

「あんた、何したっ」

「何したって言われたら、まあ、幻想郷じゃ海の幸は貴重品だからさあ」

「鰯酒用のダシに」

「この鰯頭、瓢箪の中に入れてたのかーッ」

「別にいーじゃない」

「鬼はそとー。萃香ちゃんはうちいー」

「豆まき終わったら、恵方巻き食べて鰯酒だあ」

「鰯酒は楽しみだけど　　こんな出しカス、使いたくないわね」

「……」

「しょうがない」

「しないより、マシか」

霊夢は、居間と縁側を隔てるガラスと障子の二重襖の内、外側のガラス戸を閉めて鰯の頭を刺した柎の枝を挟んだ。

「うちに来る甲斐性無しの無賽銭妖怪共は、ほとんど縁側が玄関だ

「思っているみたいだからね」

「え？　ここが玄関じゃなかったの？」

「……」

「いいから、あんたは戸口とか裏口とかにも挟んでちょうだい」
「終わったら豆まきよ」

「やったー」

ふつと霧となって散り、豆の入った升だけ持って、萃香はすぐに現れる。

「密と疎を操る程度の能力って、こんな時には本当に便利な能力ね」

「はやく豆まきやる」

「一緒にまく？　鬼も内？　それとも私に投げる？」

「逃げようか？　私逃げた方がいいかなあ」

「本当に被虐嗜好な鬼ねえ。あんた」

「言い忘れてたけど、家の節分は、あんたが考えてる様なのは、多分違うわよ？」

「鬼にぶつけないの？」

「別に鬼にぶつけてもいいけど、見立ての鬼が無くても別にいい」
「まして、見立て鬼に追い立てられてもらわなくてもいいわ」

きよとんとする萃香。

霊夢は火打ち石を持って来て、萃香から升を取り上げる。

「まず、火打ちしないと始まらないからね」
「ちゃんと、萃香にも参加してもらうから、ちょっと待っててね？」

カチツ！ カチツ！

萃香から取り上げた、升に山と積まれた豆の上に火打ち石をぶつけ打って、神聖な火花の降りるのを確認する。

「よし」

「じゃ、節分の豆まきを始めるわよ。萃香」

「私、追い立てられて玄関から逃げてかなくていいのかい？」

「いいの。いいの」

「家の節分に見立て鬼は必要無いんだから」
「でも、折角こうして色々用意して来てもらったんだから、払う悪鬼の見立てになってもらうわ」

「本当に、ただ立ってるだけでいいの？」

「いいの」

萃香を居間のだ真ん中に立たせて、霊夢は居間から出てしまふ。

「いくわよ？萃香」

霊夢は、居間との仕切り戸を越え台所に立ち、手にした升から豆を掴み出して、今にも萃香に投げつけんと構え出す。

そして。

「鬼はーそとー」

「福はーうちー」

「……」

「……霊夢」

「て… 何よ？萃香」

「『鬼はそと』で、豆を投げないの？」

「私、ただ馬鹿みたいに立ってるだけじゃん」

「家は『鬼は外、福は内』言ってる間は、まだ豆を投げないのよ」
「いいから、黙って立ってるの」

「はい」

そして、相変わらず豆を構えたままで、口上を挙げ始める。

萃香は、言われたままに居間の真ん中で、立っている。

「鬼はーそとー！」

「福はーうちいい」

天に花咲け

地に実成れ

「!!!!!!?」

鬼の目玉

「ちよッッ! 霊

「ぶつ潰せええ ええ え えええツツ!!」
博麗霊夢、渾身の怒号と共に、萃香に向けて力の限りに豆を見舞う
ッ!

ビス ビスツ ビス
ビスビジュ ビスビス
ビスツ ゴキ ビスツ
ジュツ ビス ビスジュ
ゴツ ビス スシュツ
ビスビスビス ゴキン
ジュウ ビスツ ビス
ビスツ ボキイイツ
ビス ビス ビスビスツ

節分の宵に挙げられる言霊の降りた豆は、霊夢の手中から放たれた瞬間、あるものは炒り立ての様に焼き立ち、あるものは矢の様に貫通力を持ち、あるものは堅牢なる悪鬼の角をも討ち砕く破壊力を
実に宿す。

こと妖怪にとって、スペルも何も無い 本当の豆まきの退魔!?

• • •

あと、もう数十分もしない内に陽が落ち、辺りも暗くなるだろう。
そんな頃合いの博麗神社の境内に、箒に乗ってやってきた少女が降り立ち、縁側へと歩いてゆく。

そろそろ節分の豆まきが始まる頃合いだぜっ

そんな事を思いながら、幻想郷の普通の魔法使い。霧雨魔理沙は、目に見えて姿を沈めていく日没間近な空を眺めている。

その手には、風呂敷包みの皿状の何かが下げられている。

と、何処からともなく、不思議な音が届いてきた。

お
〜
〜

お
お
〜
〜
ん

「な　なんだ？」

「この音　声か？」

おんおんおん

この、おんおん聴こえるのは霊夢ん家からだな。

もしかして泣き声か？

霊夢

なわけないか。

何となく、あの鬼っぽい　あ。そうか。

「さては、もう始めてるんだな」

「萃香が鬼役か。ハマリ役だからな」

「なんせ鬼だし」

駆け足で玄関の縁側へ駆け込む魔理沙だったが。

「うっっ」

「何か酒くっさッッ」

「な　んだこれ　萃香よりぐざい　テンションを奪われる」

戸に挟まれた萃香の鰭頭が、正しくお役目を果たしていた。

取り敢えず、一回分だけはあるが。

カラカラカラ

「霊夢うう、戸口が腐っ　じゃなくて、私にも萃香を苛め」

「お〜んおんおん」

「お〜んおんおんおん」

「ちよつと萃香っつ」

「プロなんでしょ？泣き出さないでよっつ」

「終わったから、全ての部屋が終わったんだから、もう投げないっ
て」

魔理沙の眼前で、凄惨な姿の萃香が、おんおん泣いていた。

衣服の所々が裂け破れ、ミミズ腫れのような痕や、煙草でも押し付けられた様な火傷痕も所々に。

右目にずつと手を充てたままで、右の角が端々で欠け。

左の角は真ん中で、完全に砕け折れていた。

「お〜ん

おんおんおん」

「霊夢が幼女虐待しているうーっ！」

「ちよつとツツ」

「つて、魔理沙？」

「人聞きの悪い事言わないでよ！」

シャッター音が鳴らなかった事を目ざとく確認してから、魔理沙を大慌てで居間に引き込む霊夢。

勿論、靴は脱がせた。

「萃香が鬼役をしてもいいって言うから、萃香相手に節分の豆まきをしていただけなのよ」

「豆まきって 霊夢」

「こんな事になってる萃香、屋内中引き回しては豆撃ち込んだのか」

「そつよ?」

「だって節分だもの」

「相変わらず鬼だぜ」

「誰が、鬼よ」

「失礼ね」

未だ、おんおん泣き止まない萃香の頭を軽くポンポンしながら、霊夢が冷静沈着に釈明する。

「魔理沙は、萃香を何だと思っているの?」

「萃香は鬼よ。『鬼』」

「人間の心配なんて、無用なの」

「そんなんじゃ、鬼に取っ憑かれたって知らないわよ？」

「な　なんか」

「その言い分は釈然としないぜ」

「萃香？」

「お夕飯にするから、鰯酒の用意をお願い」

「えっ　お酒!？」

ボンツ　と霧状に一瞬姿を消した萃香が元通りな姿で現れ、霊夢の後を追う。

「やったー」

「3人で宴会だー」

「もつと萃める?　もつと萃める?」

「いま、釈然としたぜ」

台所に向かう霊夢が、居間を出る寸前で魔理沙の手荷物に目ざとく目を付けて、立ち止まる。

「そう言えば魔理沙、何か持ってきてるみたいだけど、それ何？」

「何かしらの、おすそ分けかしら」

「お。これか？」

「これはだなあ」

小さい風呂敷に包まれた手荷物の事を聞かれ、上機嫌そうな顔を浮かべる魔理沙。

楕円形で丁度魔理沙の両手一杯に乗る様な皿状の何かを、霊夢の顔の前で片手に載せて、風呂敷包みを解くと。

スルルル

ふあさ。

楕円形のお皿だった。

ありふれた、人里で簡単に買える様なお皿だが、隅っこに四角枠で囲われた『魔理沙』と縦書きで焼き印されている。

良く見ると『沙』の右下にあたる、囲いの右角だけ線で繋がらず『マークになっていた。

「霊夢の恵方巻きを、おすそ分けされに、来てやったんだぜ」

「まったく」

「どいつもこいつも」

正直、霊夢の勘の半分が、そんな事じゃないかと告げていた。

「魔理沙」

「言っとくけど、家に恵方巻きは無いわよ？」

「家の節分じゃ、恵方巻きは食べないの」

「ええッ」

「そんな馬鹿なっ！」

魔理沙と萃香が揃ってショックを受ける。

「そんな事で、声揃えないでよ」

「さ 更にテンションが落ちたぜ」

「皿なだけに」

「まあ、でも大丈夫だよ魔理沙」

「そんなのなら、この萃香ちゃんが、ちゃんと持ってきてる」

気落ちしていた魔理沙が、はっと萃香に向き直り、屈んで魔理沙
皿を萃香の前に持っていく。

「さすが萃香っ！」

「節分のプロだぜ」

「本当に用意が良いわね、あんたは」

「えつつと」

「確かこの辺に、う〜ん違つか。じゃあ あっそうだ。そうだ」

萃香がまた、居間一杯に一瞬で霧散して広がり、あっと言つ間に2本の恵方巻きを載せた皿を持って出現した。

「ここだった」

「だから、何処に隠していたのツッ」

「まあまあ、そんな事どうでもいいじゃん」

「実はこれ、鬼の特別な恵方巻きでねえ」

「元々、これを霊夢にあげる為に来たのさ」

一本の恵方巻きを目の前の魔理沙皿にも、盛り付けてあげる萃香。鬼の持つ特別な恵方巻きと聞いて、魔理沙の目が輝いてテンションも上がる。

「なるほど」

「それはもう特別な恵方巻きなんだろうな」

「魔理沙の言ってる恵方巻きってさ、恵方…つまり干支で決まる一年の縁起の良い方向を向いて、一言も口にしないで食べきるんだよね？」

「そうだな」

「そうすると、福が入り込んで来るっていうぜ」

「萃香？」

「この恵方巻きは普通と、どう違うの？」

「見た目は普通だけど」

霊夢も少しだけ、萃香の持ってきた鬼の恵方巻きを食べるのが、
楽しみになっている。

「これは干支によって決まる方角じゃなくて、食べる人によって決
まる縁起の良い方角」とは、逆方向」

「つまり、食べる人にとっての不吉な厄い方角に向かって無言で食
べるのだ」

「それは、変わってるわね」

「変わってるぜ」

「凄いのは、ここからだよ お二方」

「無言で食べきる最後の一口と同時に砲身の砲口から

「ちよっと待て」

ぴんつと片手を上げて、萃香の話を中断する魔理沙。

「なんだい？ 魔理沙」

「いま、砲身とか砲口とか聞こえたが」

「そつだよ」

「『恵砲巻き』を食べる人から溜めに溜めた厄い何か、砲口からド派手に撃ち出されて、厄い方角の何処かしら辺にぶちまけてしまおうって代物さ」

「そうやって厄が無くなった分を補う様に、後ろの縁起の良い方向から、福とか何かが入り込んで来たら良いのになあ」

「って縁起物だよ」

「霊夢は、確実に食欲が半減していた。」

「何で肝心の福の部分だけが、投げ遣りな希望なのよ」

「そりゃ、鬼の持ち物だからねえ」

「鬼が保証出来るのは、厄に関する事だけだよ」

下手したら、自分が異変の発生源になりかねないわね

そんな気落ちした霊夢とは対照的に、魔理沙は興奮にうち振るえていた。

「 凄 い ！ 」

「 凄い縁起物じゃないか、鬼の恵方巻きはッ 」

「 これを食さないで、どうするんだ霊夢 ！ 」

「 そうでしょう 」

「 火力好きな魔理沙なら、この凄さが分かってくれと思うってたよ 」

「 何でか良く分からないけど『厄』を無性に払いたくて仕方ないんだ 」

「 私は食うぜッ ！ 」

「 霊夢だって、色々打ち出したい厄があるんじゃないか？ 貧困難とか 」

「 私も食べるわ 」

霊夢のやる気が、一気に極限值へ達していた。

魔理沙が魔理沙皿を顔の前に上げ、恵砲巻きの砲撃体勢に入るのを確認した萃香が、縁側の戸を解放し、ある方角を指差す。

とても寒い気にならない。

「 こっちが魔理沙にとって最新に厄い方角だよ 」

「食べ始めたら最後、無言じゃないと無効だから気を付けてね」
「あと、鬼が選んだ七種類の具が、かなり美味だから注意して」

（あつちには魔法の森って言うか　アリスん家があるんだが、気にしない事にするぜ）

「無言って無駄に緊張するぜ　今は、大丈夫なんだよな？」

「言いたい事あるなら、今の内だよ？　魔理沙」

「よう」

厄い方角に照準を合わせた魔理沙は、ゆっくりと息を吸い込み。

「厄砲ツ『ファイナルマスタースパア　ア　ア　アー　ク
ツッ！！？』」

「うるさいよ」

霊夢の冷ややかなツッコミを合図に、魔理沙が無言で恵砲巻きを貪り喰らう！？

はむっ　はむはむっ
「……………うん……………ま……………」

あむっ　ゴクンッ

しゃくしゃく はむん

「美味い、これ！」

コリッ コリッ ゴクン

「・・・ツツ ！！！！？」

「美味あい！これえー！？」

「靈夢！ 恵方巻き、異常に美味いぜ！これえ」

「そ…そう？」

「良かったわね魔理沙」

「はい！ 魔理沙、ブーッ」

両腕で、でっかいバツのマークを作る萃香を見て、魔理沙はやっと我に帰る。

「ああ！ しまった」

「私ってば、何でっ」

「だから注意してって言ったじゃん」

「残念賞です」

「魔理沙は、今年も変わらずの厄さ加減で逝くでしょう」

「そん な あ あ あ」

居間の畳と同化しそうになる程、消沈して臥せる魔理沙。 心な

しか、厄値がむしろ増加したような澱んだ空気が付与された気がする。

そんな魔理沙を後目に、今度は霊夢が前に出る。

「不甲斐ないわね。魔理沙は」

「私を手本を見せてあげるわ」

「萃香？ 私の厄い方角はどっちなの？」

「うん」

「霊夢の場合はちょっと複雑なんだよねえ」

「こっちと思えばあっち、あっちと思えば」

萃香が眉間に皺を寄せながら、あっちこっちを指しては、その指先が回遊している。

「何か」

「不愉快な指先ね」

「流石は霊夢だぜ」

「魔理沙うるさい」

「どうせ、神出鬼没な妖怪でも指そうとしているのよ。もう、取り敢えず2番目に厄い方角とかでも良いから」

「2番目とかじゃ駄目なのかしら？」

「あ。」

「それなら、こっち」

途端にぴつと、ある方角を指差す萃香。

「繰り上げ 繰り上げ 全く問題無いよ」

「じゃあ、私はこっちに厄を棄てるとするわ」

（なるほど 確かにこっちの方にも、厄い鬼が住んでいるわね）

「霊夢は、魔理沙みたいになんか言わないの？」

「って、もう食べ始めてるよ」

はむっ はむっ

「……」

はふ… あむっはぐっ

ゴクン ばくん はむっ

「……」

ばくばくと、恵砲巻きにパク衝く霊夢は、魔理沙と違って、一向に言葉を発する気配が無い。

「おー。霊夢はやっぱり自制心が強いんだねえ」

靈夢の雄姿に、萃香は関心の声を上げる。

しかし、靈夢を良く知る魔理沙が、無言の靈夢の状態を把握出来ていた。

ばくばくばくつ

はくはくつ

「……」

ばくんつ

はふつ はふつ

「……萃香」

「違う 萃香、これ」「靈夢の奴」

「余りの美味さに理性無くして、憑かれた様に喰ってるだけだ」

「 本当だ」

「靈夢、喋らないんじゃないんだ」

萃香と魔理沙が見守る先で、美味過ぎる恵砲巻きに出逢った貧困巫女さんが、取り憑かれた眼で一心不乱に食べ続けていた。

「魔理沙 ああ」

「靈夢が 靈夢が怖いよっ〜」

「我慢しろ、萃香」

「靈夢がこうなったら、もう厄が撃ち出されるまで、戻ってこれまい」

「恵方巻きに抜いてもらおうな？ この靈夢も持ってってもらおう」
その恵砲巻きも、もう少しで靈夢の中へ収まりきる時が近い。

そんな時

ヴウ、ヴウ、ウ、ウ、
ウ、ウ、ヴウ、ヴウ、

突如、低い唸り声の様な奇音が、3人の居る居間中に響き出した。

「な　なんだ　」

「萃香がやってんのか？」

「魔理沙　　靈夢の恵砲巻きが　　」

靈夢が食べる恵砲巻きの砲口が、尋常ではない重低音を唸らせていた。

重低音の振動が、重低音の振動を刺激し、居間全体がうち振るえる。

ウ、ウ、ウ、ウ、ウ、ウ

幾重にも重なる重低音の喧しさに、萃香と魔理沙は互いの声すら伝わりにくくなってきた。

「魔理沙あー！」

「これはッ！」

「これは、砲口に溜まった厄がッッ」

「恵砲巻き限界にいいーッ！」

「つまり、霊夢の厄が恵方巻きの許容量を超えているって事かああッ」

霊夢は、居間を襲う超常現象などお構い無しに、どんどん太巻きを食い無くしていき、激震を増大させていく。

それ程に萃香の恵砲巻きが、美味過ぎるのだ！

ウウウウウウ

ヴウヴウヴウ

ウウウウウウ

「馬鹿なああー！」

「人間のッッ」

「人間の厄程度が、鬼の許容を脅かすなんてええ」

「さ 流石霊夢だぜええええ！！」

「有り得ないよッッ」

「こんな厄過ぎる厄の権化が、質量と肉体すらもって霊夢に取り巻いているみたいなものだよ」

「こんなの、人間が存在し続けていられる筈がないんだからッ」

霊夢の恵砲巻きは、既に局地地震レベルの鳴動を砲口に渦引き込んでいた。

「魔理沙ッ」

「兎に角、霊夢の後方の離れた所へッ」

「霊夢の厄砲から一番離れた、後方の隅で何かに捕まってるんだッ」

その夜。

博麗神社から紅魔館の方角へ向けて、不可視な音の爆砲が幻想郷の空を裂き飛んで行った。

その圧倒的な威圧感、近づき難き畏怖の念は、さながら龍神の如し。

後に記者の天狗は語る。

確かに見たと。
その怖ろしき不可視の先頭で、輝く双眸。
色違いのオッドアイな双眸を。

もじゃ。むじゃ

はむ はむ はむ

「ん」

ゴクン。

「んんん」

「美味しかったあ!!?」

「何か、少し涙がでてきた 美味し過ぎる」

「んっ しかも何か、とても肩の荷が降りた様なスッキリ感が」

「これが、厄が抜けるって事なの ねえ」

霊夢の眼前に広がる、博麗神社の境内。

霊夢の眼前に広がり過ぎる。余りに広がり過ぎる博麗神社の境内。

博麗神社の境内が、縁側の戸口のキャパシティを遥かに超えて、霊夢の前にパノラマ展開していた。

つまり、縁側への壁が丸々無くなっていた。

「・・・な・・・な」

陽も落ち、居間に吹き荒ぶ夜の冷気が、霊夢の脇を切なくさせる。

「なんぞ これえ〜！」

開放的過ぎる博麗境内では、霊夢の叫びも反響しにくい。

「萃香あぁッ！」

「これ、どうしてくれ あれッ 居ないッ」

「魔理沙？ 魔理沙も居ないッ」

「2人共一体どこに」

「……」

「ああ……そうか」

「厄……か。」

10巻：萃まる鬼、白黒、そして節分夜行（後書き）

ええ、まあ

勿論節分当日に投稿する予定でしたよ。

むしろ、時間的にもあわせて、午後五時前位に更新しようと思ったら、
していたのですが・・・

仕上げている内に、
寝ちゃった orz

起きたら、始まるのは執筆ではなく仕事です

そりゃ、5日になるさ。只今午前2時22分。

でも、それが事実
DEEP三昧と言う筆者なのです。

だから気にしない。

雨降りでも気にしない
遅れてても気にしない
笑われても気にしない

気にしない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9820g/>

景品の出る東方賽銭箱

2010年10月8日23時25分発行